

分科会②

テーマ

都市の農業を活かしたコミュニティづくり ～農的活動による社会的課題解決を目指して～

分科会②では

練馬区の都市農業（アーバン・アグリカルチャー）を通じて区民が得られる多様な機能（教育や福祉、まちづくりなど）と地域コミュニティの形成にもたらす効果を明らかにしていきます。また、海外の都市における市民自らが耕作する多様な農的空間（コミュニティ・ガーデンや菜園による都市緑化など）の創出とそれらを通じて社会的課題の解決に取り組んでいる状況を学びます。さらに、それらの活動を支える非営利組織（行政と市民組織のマッチングやネットワーキング、パートナーシップの構築）のあり方、行政によるフードシステムにおける農地や農的空間の位置付けなどについて学び、それらを通じて都市住民（練馬区民）の都市農業への理解と関心を高めます。



井原 満明

株式会社地域計画研究所 顧問・取締役

専門は地域計画。1973年に練馬区で初めて地区整備計画に農地を位置付ける。また多摩ニュータウン開発における酪農と養蚕の共存を目指した計画(1984年)では、農家と共にトヨタ財団から賞を受ける。以降、農山村地域における地域再生や第三セクターを支援し、地域づくりを支える中間支援組織や社会的企業などを提案し関わる。2010年から5年間、長野県木島平村に招聘され新たな価値観によるむらづくり組織「農村文明塾」の運営に関わる。



加藤 義松

区内農業者・(特非) 全国農業体験農園協会理事長

江戸時代から続く農家の12代目。野菜作りを教える農業体験農園、ブルーベリー摘み取り園、柿の直売など地域密着型の農業を展開する。全国農業体験農園協会理事長。



長島 良介

農業体験農園利用者・前練馬区教育委員

16年前に農業体験農園に参加。地域とのつながりが全くなかったところから、子供の通う小学校のPTA会長、練馬区教育委員等に就任。地域との関わり大切さを学ぶ。農業体験農園に参加したことにより大きく人生が変わる。



後藤 光蔵

武蔵大学 名誉教授

専門は農業経済学（土地問題、農業構造問題）。都市農業は武蔵大学に来てから取り組んでいる。不要とされた都市農地・農業の評価が変化し法的位置づけも転換する時期であり、練馬農業から多くのことを学んだ。



伊藤 雅史

練馬区農の学校修了・ねりま農サポーター

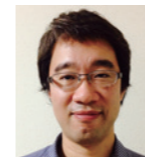
平日は会社員、休日は農サポーターをしている。今回は、被招聘者の皆様と都市農業の魅力を共有し、各都市が実践している良い事例（good practice）を学びたい。特に、市民の立場から、社会公正（social justice）・福祉（well-being）の分野に興味を持っている。



栗秋 俊彦

農業体験農園利用者

大学卒業後金融機関と工業用X線メーカーに勤務。ニューヨーク、ロンドンへ6年在住。平成20年から農業体験農園に参加、小学校以来の土いじりでの新たな経験と近隣住民との日常生活に大きな影響を受けている。



安藤 丈将

武蔵大学 社会学部教授

日本と北東アジア（主に香港）の社会運動と民主主義を農に注目して研究している。著書に『脱原発の運動史～チェルノブイリ、福島、そしてこれから～』（岩波書店）、『Japan's New Left Movements: Legacies for Civil Society』（Routledge）など。練馬区に引っ越して7年目、今年も区内の農園で畑仕事をしている。



村山 純子

農業体験農園利用者・「野菜のおすそわけプロジェクト」世話人

2015年、農業体験農園利用者から野菜の寄付を募り、区内の子ども食堂やひとり親世帯に提供する「おすそわけプロジェクト」を開始。2016年からは同農園内におすそわけ用の共同畑を持ち、子ども食堂のスタッフ、ボランティアとともに野菜を作っている。



ニューヨーク

ネヴィン・コーエン

ニューヨーク市立大学大学院 公衆衛生学専攻 准教授



ロンドン

サラ・ウィリアムズ

NPO サステイン プログラムディレクター



ジャカルタ

ディア・メイディアンティ

チトラ・ナガ・チュムラン社 植物防疫研究所長



ソウル

イ・チャンウ

韓国都市農業研究所長



トロント

ジェームズ・クーンズ

NPO トロント・アーバングロウーズ コーディネーター

海外参加者のプロフィールは、41～60ページに記載しています。

分科会②

加藤 義松 / 練馬

区内農業者・(特非) 全国農業体験農園協会理事長

長島 良介 / 練馬

農業体験農園利用者・前練馬区教育委員

村山 純子 / 練馬

農業体験農園利用者・「野菜のおすそわけプロジェクト」世話人

農業体験農園から生まれる地域コミュニティ

世界都市農業サミット2019



全国農業体験農園協会
理事長 加藤義松

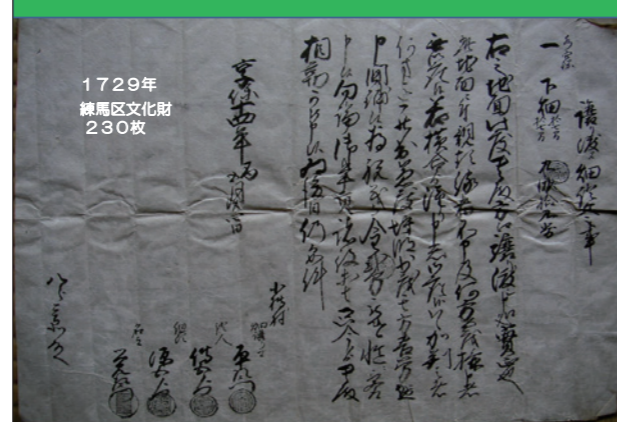
加藤氏

南大泉で農業をしている加藤義松と申します。海外の参加者の皆さんには昨日、私の農業体験農園の炊き出し訓練にお越しいただきました。海外では農地を活かした防災訓練という例はないと思いましたので、是非お見せしたかったのです。平日だったので、どのくらい人が集まるか非常に心配しましたが、296名の地域の方が集まりました。それだけ、農地が防災に役立つということで地域の方々に安心感を与えていると同時に、非常に期待感があるということを感じました。

都市農業は長い歴史の中で大変な逆風が吹いていた時代から、今は世界都市農業サミットのようなイベントを開いていただける時代となりました。私たち農業者の環境も非常に大きく変化して、農業経営自体も時代に合わせて変化してきました。特にコミュニティへの意識が高くなり、コミュニティを意識した経営へ移行してきました。昨日海外の参加者の皆さんにご覧いただいた農業者の直売所は、現在、自動販売機ですが、当初は対面式で販売していました。ところが、長時間の対面販売は大変なので皆が自動販売機を置くようになり、今は自動販売機が

主流となっています。それでも農業者は常にコミュニケーションをとることを大事に考えて、気を遣って販売をしています。私が経営している農地では、ブルーベリー、柿、養液栽培のトマト、農業体験農園の4つありますが、それぞれお客さんの層が違います。ブルーベリーは若い世代、柿は今朝も販売しましたが高齢者中心、トマトは幅広い年齢層です。農業体験農園も年齢層が非常に幅広く、またコミュニティの深さも非常に深いと感じます。何故なのかはこれから説明していきます。

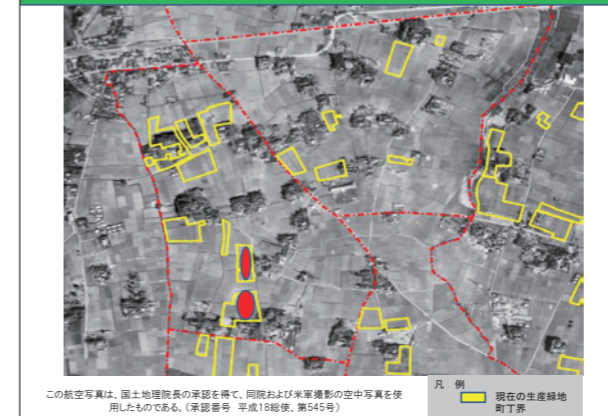
加藤家土地譲り渡し書



こちらは私の家の古文書の写真です。私の家は300年続いており、私で12代目になります。この古文書は230枚あるうちの1枚で、230枚の古文書からは色々なことがわかります。実は農業者は農業だけでなく、地域社会・寺・神社への奉仕、現代で言うと「税金を安くしてほしい」といったような年貢の交渉等にも関わっていました。現代でも多くの農業者は、町会の役員や学校PTA、消防団等地域社会のリーダーとなって活躍しています。このように地域との関わりが深いのは、やはり我々の江戸時代からのDNAがそうさせているのかと思います。農業者は農

業だけでなく地域社会を支え、助けあっていくというやり方は現代まで受け継がれています。

1947年南大泉の移り変わり



これは1947年の航空写真です。当時あるのは農地と屋敷森で、住宅地は少し見えますが非常に少ないです。この赤い部分が私の畑で、黄色の部分は現在も残っている生産緑地ですから、今もかなり残っていることが分かります。今もなお残っている農業者は、やはり非常に経営に熱心であるということが言えると思います。だからこそ、ここまで残ってきたのです。

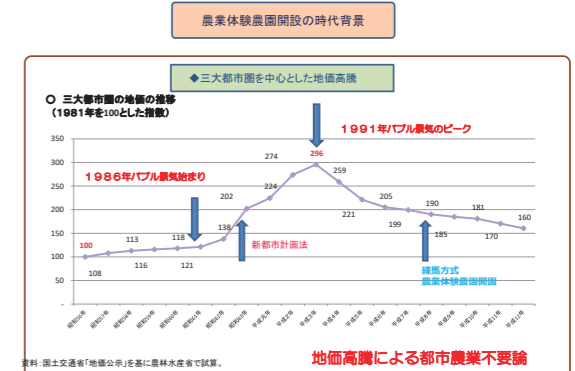
1968年新都市計画法



1968年「都市計画法」で、国から突然「10年以内に宅地化しなさい」と言われたことで大変な騒動となり、都市の農業者と国との間で税制の戦いが長い間続きました。その間に「長期営農継続制度」「生産緑地法」などの法律ができて、最終的に2015年「都市農業振興基本法」において、「都市に農地があってもいい」ということになりました。それまで農地が多く広がっていた練馬でも急激に宅地化され、家が建ち始めました。新しい家が増えるにつれて、昔と比べると地域のつながりが大きく変化し、町会等の加入率も下がりました。近年の日本は、近隣と関係がな

くても暮らしていけるような社会となり、地域社会にも様々な問題を提起しています。

都市農業・都市農地をめぐる施策の背景



1986年の日本では、いわゆるバブル景気が始まり、1991年にピークを迎えます。これは当時の土地の値段のグラフですが、この間の5年間で急激に上がったということがわかります。「土地が値上がりするのは農業者が土地を手放さないからだ」と批判され、マスコミのターゲットになり、長い間私たちは非常につらい環境の中で農業経営をしていました。この年代を経験した農業者にとっては大きな教訓として残ったわけです。世論を味方にしないと私たちの都市農業は生き残れないのだと心に刻まれた出来事です。

農家の経営が少しずつ変化していく



農業の経営も昔は市場一辺倒でした。私の家でも当時100%を市場に出していましたが、今では100%直売型に転換しています。都内の農産物も現在は70%が直売型で、市場に出しているのは30%位です。そういった意味では、農業者自身が近隣住民の方を非常に意識した経営に変化してきたということです。

農業体験農園とは・・・

消費者参加型農園の種類と相違点

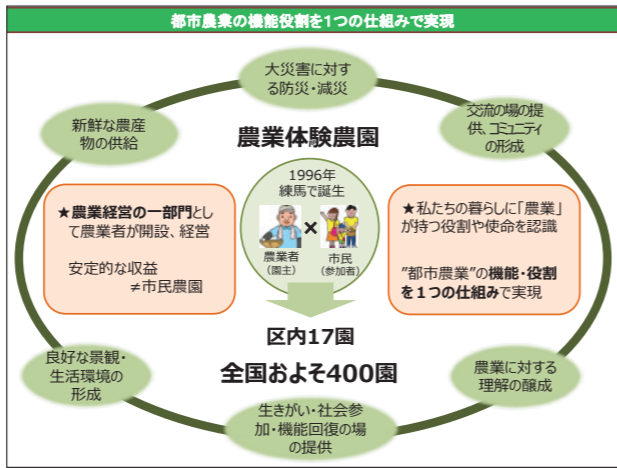
- 市民農園
 - 農地を区画貸し、播種・栽培管理・収穫までの一連の作業を入園者が自ら実施する
 - 農地所有者は、農地の提供のみ
- 観光農園
 - ブルーベリーなどの、収穫体験型
 - 観光目的の一つとして果樹などの摘み取りを体験
- 農業体験農園（練馬方式とも呼ばれている）
 - 市民農園とも観光農園とも異なる
 - 農家自らが野菜作りのコツ面白さや農業文化を伝える
 - 農家が市民と交流しながら運営をする

市民参加型の農園は3つあります。1つは市民農園で、種、苗、肥料、全部自分で用意して、作り方等も個人に任されている、自己完結型と言われているものです。それから観光農園ですが、練馬区ではブルーベリー農園が非常に多いのですが、柿のもぎ取りなどもあります。そして私がやっている農業体験農園ですが、全国では練馬方式と呼ばれています。市民農園とも観光農園とも異なり、農業者自ら野菜作りのコツ、面白さ、農業文化を伝える、農業者と市民が交流しながら運営をしていくというスタイルです。

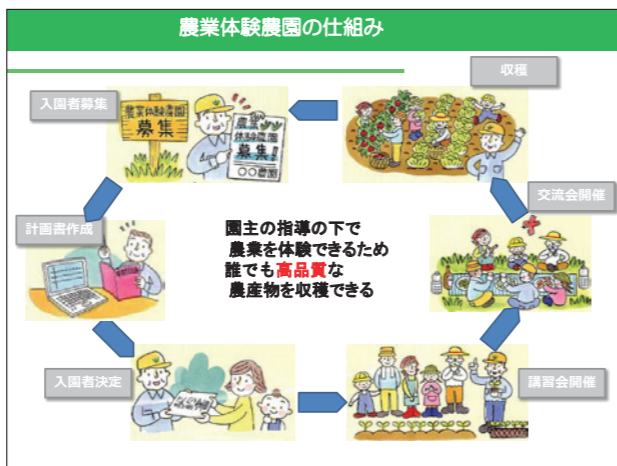
農業体験農園はひとつの農地で多様な機能を発揮できる

都市農業には6つの機能があります。昔は多面的機能と呼ばれていましたが、今は多様な機能という言い方をしています。1つは交流創出機能、それから防災機能です。昨日炊き出しをやりましたが、地域と連携して行っています。昨日も実際、行政、町会、私たち農業者この三者が連携して炊き出しを行っていました。地産地消機能、これは言うまでもなく、その地で採れたものをその地で販売することが一番理に適っているということです。それから食育・教育機能ですが、現在、農業者は子どもたちの受け入れをかなり行っています。練馬の場合は小

学校3年生で5ページ程度、農業について教科書に掲載され、5年生になると10ページを超え、地域の農業を学ぶ形になっています。我々も学校に行ってお前授業をしたりしています。その他にも環境保全機能や景観創出機能も持ち合わせています。



これからお話しする農業体験農園は、これら6つの機能があると言われています。農業体験農園は1つの農園で全ての機能が発揮できるようになっています。現在区内には17農園、都内には100農園ほどあり、全国でおよそ400園、この練馬方式の農業体験農園があります。やはり、この仕組みがコミュニティを強くしているのです。



その仕組みを簡単にお話しますと、まずは区報等広報媒体や色々な方法で利用者の募集を始めます。その間に作付け計画を作り、講習会が始まります。栽培だけでなく必ず食事会や収穫祭なども行うというのが練馬の農業体験農園のスタイルです。1年を通して野菜を作り、このようなイベントを体験して農地で楽しい時間を過ごすことができます。

講習会作付け表

これは利用者に配っている作付け計画表です。1人30㎡の土地で、約30種類の野菜を作ります。農業者がローテーションを考えて、このような表を作っていきます。農業体験農園は肥料の量も決めているので、どの区画を土壌分析しても同じ結果になります。区民農園では、個人が自由に肥料をやり、栽培するものも異なります。私が実際に48区画ある区画の土壌分析を全部したところ非常にばらついていました。このようにバラバラだと、いざ問題が起きた時に対処が難しいのです。

講習会日程表

月	日	内容	講習会時間
3月	14日(水)	10時(講師:アキラさん) 1年目のお話し(講師:アキラさん)	10:00~11:00
	14日(水)	15時(講師:アキラさん) 10時(講師:アキラさん) 11時(講師:アキラさん)	15:00~16:00
4月	4日(水)	10時(講師:アキラさん) 11時(講師:アキラさん)	10:00~11:00
	11日(水)	10時(講師:アキラさん) 11時(講師:アキラさん)	10:00~11:00
5月	23日(水)	10時(講師:アキラさん) 11時(講師:アキラさん)	10:00~11:00
	23日(水)	10時(講師:アキラさん) 11時(講師:アキラさん)	10:00~11:00
6月	27日(水)	10時(講師:アキラさん) 11時(講師:アキラさん)	10:00~11:00
	27日(水)	10時(講師:アキラさん) 11時(講師:アキラさん)	10:00~11:00

これは講習会日程表です。このように、1年を通して60日くらい講習会をしています。



こちらが講習会の様子です。実際に座学をやって、作業を見せて、その通りに区画で再現するという方法になっています。



作業はすべて利用者が行いますが、農具もすべて用意してあります。種、苗も全て用意してあります。このシステムだと、素人でも1年目から八百屋に並ぶような立派な野菜を作ることができます。

農家の高い技術が生産性を高め健康に役立つ

1区画 約270kgの収穫量 (30㎡)

一人当たりの年間消費量 90.8kg

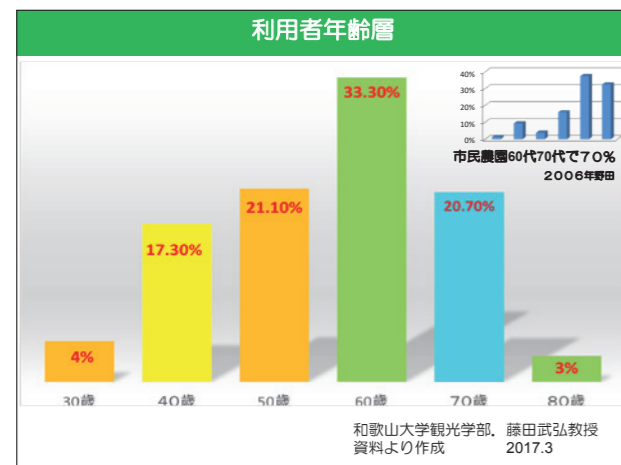
1区画で家族3人分をまかなえる (2018年東京大学 飯田)

収穫量は1区画約270kgで、1人当たりの消費量にすると約3人分あります。1区画で3人

家族揃えるので、1人が平均4軒のお宅におすそ分けをしているというデータも出ています。



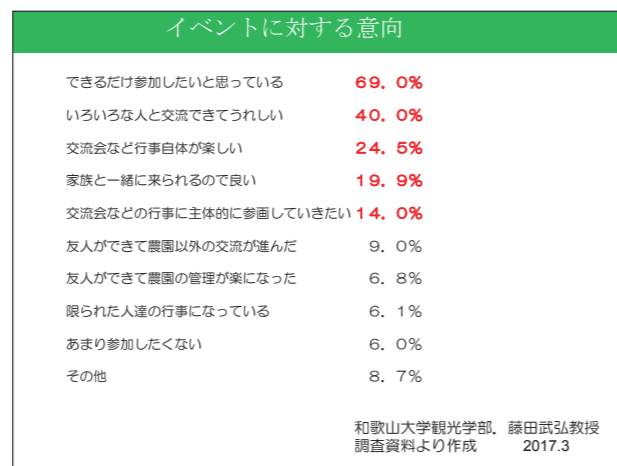
上空から見た様子です。赤く囲ってあるところが農業体験農園です。住宅地にありますから、非常に景観が良くなっています。



こちらは年齢層ですが、80代までと非常に幅広いです。市民農園は70代、80代が中心になっていますが、農業体験農園では、いかに年齢層が幅広いかがよくわかります。なぜこうなのかというと、種、苗、肥料、農具が用意され、野菜作りまでプロの農業者が教えてくれるということで、野菜作りのハードルが低いからだとも言われています。



そして、イベントも非常に多くやっています。子どもたち向けのイベントも数多く、スイカ割りや花火大会、子どもたち向けの食事会なども実施しています。

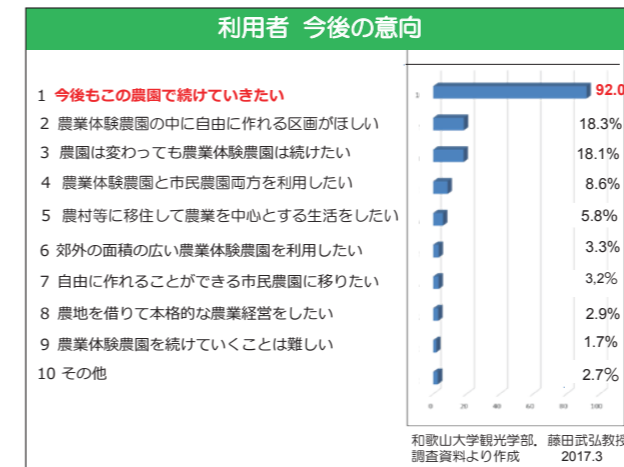


約7割位の人たちが、イベントに参加したいと思っているようです。やはりイベントを通して人と人のつながりは強くなりますし、楽しい時間を一緒に過ごした仲間というのは連帯が強くなっていくと思っています。

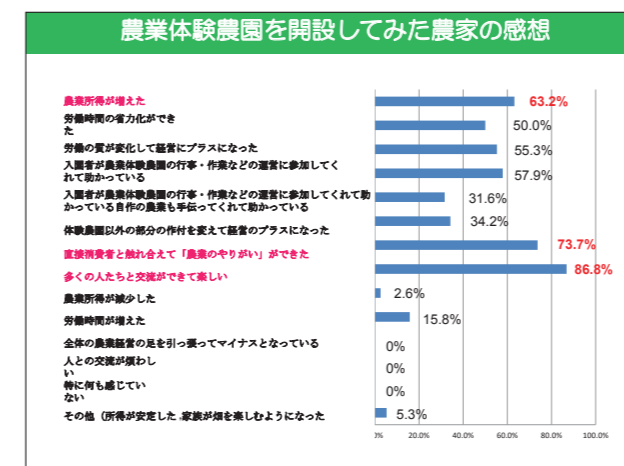


こちらは防災訓練の様子です。このような活

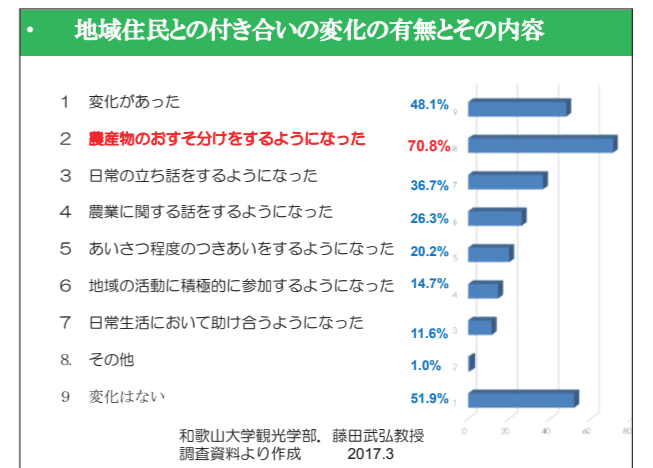
動をすることで、地域との連携や地域の畑に対する安心感を生んでいると思います。そういう効果は非常に大きいと思っています。



今後も農業体験農園を利用したいと思っている人が、17農園平均で92%もいるようです。誰もが今後も続けたいと思うシステムなので、全国に広がりを見せているのかなと思っています。



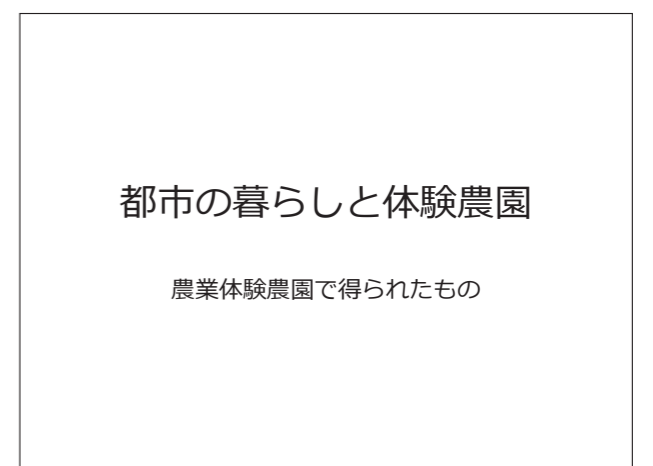
これは実際に農業体験農園を開設した感想を農業者に聞いた結果です。所得が増えた点はもちろんですが、やはり、やりがいがあった、仕事で感謝・評価されるというのがありました。農業の仕事は1人でやる事が多く、なかなか評価を得にくいのですが、農業体験農園だと評価を得られて非常に感謝されるので、やりがいに繋がりさらに労力を注ぎ込めるといった効果もあるようです。



そして、近隣住民との付き合いの変化ですが、70%の人が農産物をおすそ分けをしています。



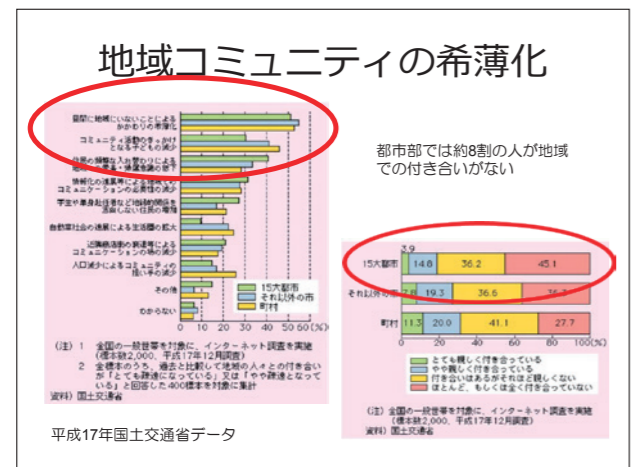
これから話していただく長島さんは、農業体験農園を利用して人生が変わったと聞いています。また、村山さんには、おすそ分けの話もしていただきます。利用者の皆さんからの発表から農業体験農園がどんな効果を与えているのか感じていただきたいと思います。



加藤さんの農業体験農園を利用させていただいている長島と申します。16年と言う長きにわ

たってお世話になった農業体験農園で、大げさかもしれませんが、本当に人生が大きく変わりました。本日参加していただいた皆さんには、都会に住みながらも農業体験農園が身近にあることと、そこで得られた多くのことに感謝している一利用者の視点から発表させていただきたいと思います。

最初に、簡単に自己紹介をさせていただきます。私は1967年生まれ、今年で52歳になります。仕事はファイナンシャルプランナーという仕事をしていて、妻と23歳の長男を筆頭に大学生、高校生の娘が2人います。21年前に父の仕事を手伝えるために会社を辞め、練馬区の南大泉に移ってきました。3人目の子どもが生まれて間もない16年前、妻が何の気なしに応募した加藤さんの農業体験農園に幸運にも当選しました。ある日突然妻から、当選したからよろしくと言われて、初回の説明会から参加することになりました。これが全ての始まりでした。



本題に入る前に、このデータをご覧くださいと思います。これは、地域で人と人との関係性が希薄になっていることを表しています。都心の多くの家庭が日中は仕事場に出ていて、住んでいるところで他人と関わることが少なくなってきました。右下のデータを見てもお分かりのように、全く付き合いがないとか、付き合いがあるが親しくないというのを合計すると8割位です。ほとんど地域で他の人と関わりがないのが日本の現状であると言えます。私自身も農業体験農園を始める前は、このオレンジの部分に入っていて、実際のところ、私も農業体験農園に参加しなければ、地域とのつながりはなかったと言っても過言ではないと思います。



では、農業体験農園に参加して何が変わったのかをお伝えしていきたいと思います。これは私が作った野菜で、このように自転車で運びきれないほど採れるので、近所におすそ分けをしています。園主の加藤さんのわかりやすい指導で、1年目からこれくらい立派な野菜が作れました。おすそ分けをすることで近所との付き合いも深まり、もちろん野菜の知識も増えました。それまでは料理もほとんどやらないので、一部の野菜の名前しか答えられなかったのですが、今ではスーパーに行ってもほとんど全ての野菜の名前や食べ方などがわかるようになりました。野菜だけでなく食に対する意識が非常に高まりました。農業体験農園は、農地を借りているというより文字通り農業体験をして学んでいるという感じです。採れたての野菜のおいしさも初めて知ることができました。



これは夏野菜です。見た目もすごく綺麗にできましたが、こんなにおいしいものだとは思いませんでした。



これはある日の収穫ですが、一度にこれだけ収穫できます。近所の友人知人におすそ分けしないと野菜が無駄になってしまうので、本当にご近所付き合いに一役買ってくれています。



こちらは講習会の様子です。野菜についての知識や作り方に加えて、どのような土がおいしい野菜を作ってくれるのかということや肥料や農薬の正しい知識を学ぶことができるので、非常に勉強になりました。

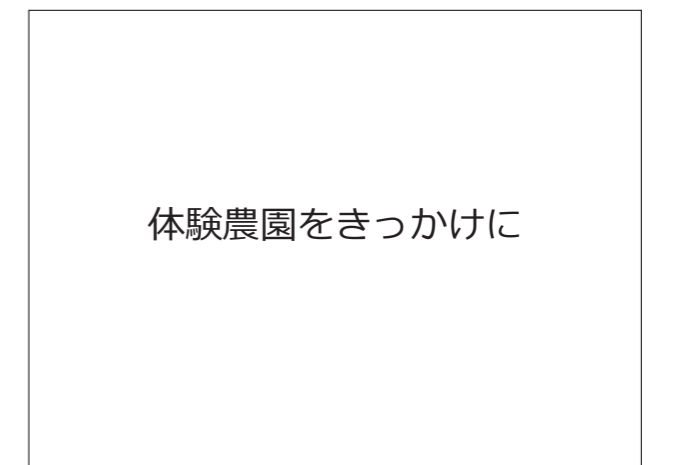


これが農園で開かれる食事会の様子です。毎

年定期的に開催していただいているので、利用者同士の交流が広がり、地域のつながりを実感できます。このように、農業体験農園では多くの人とつながりを持つことができました。



1番大きかったのは、子どもたちと強いつながりを持てたことではないかと思います。こうして、子どもたちに直に土に触れて野菜を収穫する体験をさせることができました。野菜をおいしそうに食べてくれる時、農業体験農園に参加できて本当に良かったと感じたのを覚えています。



昔、私は子どもの頃から地域と全く縁がありませんでした。父がサラリーマンを辞めて何度か仕事を変えた関係で、小学校6年と中学校3年になる直前に転校・引っ越しをして、当時はとても辛かったのを覚えています。知り合いといえば、地元の子供たちやお父さんお母さんと挨拶を交わす程度で、実家に帰ってもほとんど友人もいないような感じです。現在住んでいる南大泉でも、地元の人とどう関わっていいか、当時は皆目見当もつきませんでした。それが、農業体験農園をきっかけに大きく変わりました。

小学校のPTA会長に



1番大きなきっかけは、農業体験農園をやったことで、子どもの通う小学校のPTA会長に推薦していただいたことです。私以外にも農業体験農園にはPTAの役員を務めた方がたくさん参加しています。PTA会長を3年間務め、練馬区内の小学校の連合会の会長などもやらせていただき、地元だけでなく練馬区全体にお付き合いが広がっていきました。その後ご縁があって、練馬区の教育委員にも任命していただき、特別な経験をさせていただきました。



おやじの会

これは、PTA会長の時に設立した「おやじの会」です。お父さんたちに集まってもらって、お祭りでは10年以上焼きそばの店を出店しています。写真のように毎回多くの方が参加してくれています。これは私にとって大変嬉しい経験であり、大切なつながりです。



消防団活動

こちらは地元の消防団の活動です。自分が消防団に参加するなんて考えもしませんでした。農業体験農園に参加して、つながりができた事がやはり1番大きいと思います。消防団には、私以外にも農業体験農園の参加者が何名か在籍しています。



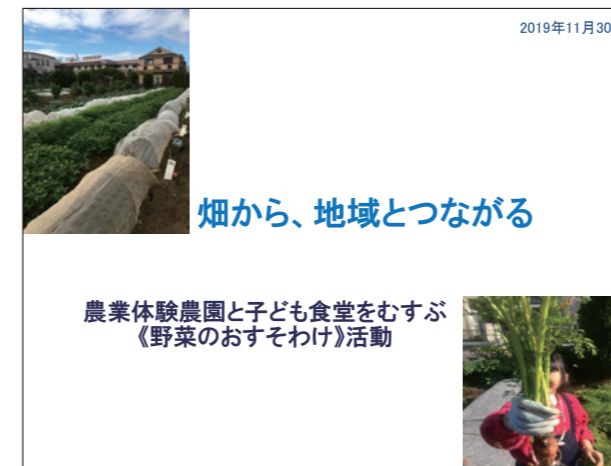
農園の 素晴らしい風景

私は毎朝、趣味でランニングをしているのですが、これは農業体験農園の農園越しに見える陽を毎日撮ってきたものです。毎朝この景色を最初に見られることが本当に気持ちが良いのです。練馬区でこんな景色が見られるとは思っていませんでしたが、これも都市にある農地のお陰だなと思います。

最後に



最後になりますが、このように16年にわたり農業体験農園が私にもたらしてくれたものは、農業の体験だけではありませんでした。人と人とのつながりやリフレッシュの時間、素晴らしい景色、私の人生において結果としてかけがえない体験でした。都市において農業体験農園は最高の贅沢だと思います。いつまでも残ってほしいと心から願っています。これは、この間、たまたま帰ってきた大学生の娘と撮ったものですが、このような写真があるのも非常に嬉しいことです。以上が私の農業体験農園で得られた様々なものになります。ご清聴ありがとうございました。続いて、同じ農業体験農園を通じて積極的にボランティア活動を行われている村山さんにバトンタッチいたします。



畑から、地域とつながる

農業体験農園と子ども食堂をむすぶ
《野菜のおすそわけ》活動



村山氏

こんにちは。村山純子と申します。私からは「畑から、地域とつながる」と題して、農業体験農園と子ども食堂をむすぶ「野菜のおすそわけ活動」という活動についてお話させていただきます。

自己紹介

村山 純子

練馬区在住 今年で7年目

*2002年~2014年

NPO法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ理事

*2016年~現在

同法人 事務局スタッフ

*2014年~ 農業体験農園「緑と農の体験塾」塾生となる

*2015年~ 《野菜のおすそわけ》プロジェクトを開始

自己紹介をさせていただきますと、私は練馬区在住で今年で7年目になります。それまで30年以上、農地のない都心の区に住んでいました。自分で食べる野菜を自分で作ってみたいと練馬区に移り住み、農業体験農園の利用者となりました。また私はひとり親として子ども2人を育ててきた関係で、NPO法人「しんぐるまざあず・ふぉーらむ」という団体の理事を長く務め、現在はその事務局のスタッフとして仕事をしています。

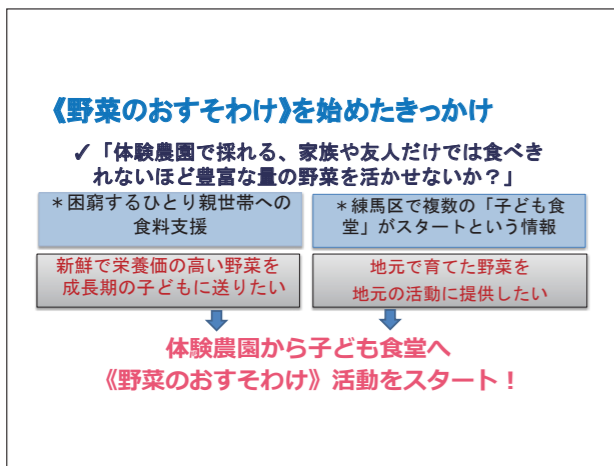


《野菜のおすそわけ》とは

体験農園の利用者の方々から野菜を募り「子ども食堂」などの地域活動や食の支援活動などに寄付する

「野菜のおすそわけ」とは、農業体験農園では家族や知り合いだけでは食べ切れないほど野菜が多くできる時期があります。そんな時は皆さん、近所や知り合いの方などに配るのですが、地域活動や食の支援活動に寄付してはどうだろうと提案して、皆さんから少しずついただき、そのような団体に送る活動が「野菜のおすそわけ」です。

この写真は、2015年の5月、野菜のおすそわけを始めた頃の様子です。農業体験農園のハウスの中に日時を掲示して野菜を集め、野菜を利用する子ども食堂のスタッフがそれを引き取りに来ます。



私が野菜のおすそわけを思いつき、始めたきっかけをお話します。大学進学を目指す中学生を抱えたひとり親の方が、食事を1食しかとらず、野菜や肉はほとんど買わず食費を削り、学習塾費用や入学費用準備に当てているという話を聞いたことです。それを聞いて思わず、私は農業体験農園で作った野菜を段ボールに詰めて、その方に送りました。体ができる成長期の子どもが食べてないということに非常にショックを受けた私は、農業体験農園の栄養価の高い新鮮な野菜を定期的に提供する仕組みを作ることができないかを考えていました。そんな時に練馬区で複数の子ども食堂がスタートするという話を聞きました。地元の子ども食堂で地元の新鮮な野菜を使ってもらえないか、子どもたちに食べてもらえないかと、子ども食堂の主催者の皆さんに連絡を取り、また、園主の加藤義松さんにご協力いただき、野菜のおすそわけをスタートしました。

「子ども食堂」とは

- * 子どもたちや高齢者など地域住民に対し、地域のボランティアが無料または安価で栄養のある食事を提供する取組み
- * 子どもの貧困問題を背景に2015年頃から全国各地で取り組まれるようになった
- * 2019年現在、3718カ所

(NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびの会の調査結果)

(厚生労働省 平成30年4月28日「子ども食堂の活動に関する連携・協力の推進及び子ども食堂の運営上留意すべき事項の周知について(通知)」より)

子ども食堂という名前を出しましたが、皆さんどこかでお聞きになったことがあるかもしれません。子ども食堂とはどういうものかという、厚生労働省の文言を引用すると、〈地域の

ボランティアが子どもたちや高齢者などの地域住民に対して、無料または安い値段で栄養のある食事や温かな団欒を提供する活動〉と説明しています。日本では、2013年に子どもの貧困率が16.1%と発表され、約6人に1人の子どもが相対的貧困ライン以下の生活をしているということが知られるようになりました。そういった子どもの貧困問題を背景に2015年頃から全国各地でこの活動が取り組まれ、2019年現在、全国で3700カ所を超える子ども食堂があるとされています。

「子ども食堂」活動はさまざま

- 困難を抱える子どもたちへの支援を中心に活動するもの
- 地域たちを対象とした交流拠点を設けようとするもの
- 子どもたちに限らず、その他の地域住民を含めて対象とし、交流拠点を設けようとするもの

厚生労働省平成30年4月28日通知より

子ども食堂と言うと、子どもがやってきて食べると思われがちですが、様々なタイプがあります。厚生労働省の説明にもあるように、子どもだけを対象にしているわけではなく、お子さんだけで来るといよりも親子でいらっしやる形が多いと聞きます。また、困窮している家庭だけではなく、地域の子どもを対象とする食堂や高齢者など、地域の住民全体に開かれている食堂もあります。



これは練馬区が作成した子ども食堂マップです。黄色い印が子ども食堂の場所で、現在練馬

区に14カ所あります。赤い印は、農業体験農園です。全部で17カ所あります。意外とどちらも近くにあるという印象です。ここにあるのが、私が活動している加藤義松さんの「緑と農の体験塾」です。2015年におすそわけを始めた当時は、ここを起点に3カ所の農業体験農園を回って野菜を集め、4、5カ所の区内外の子ども食堂に野菜を配っていました。

* 他の体験農園にも呼びかけ、3つの体験農園から野菜を集荷、5つの子ども食堂へ配送。
* 農園それぞれで近くの子ども食堂におすそわけをするようになる

しかし、日程調整やドライバーの確保などが難しいなか、次第に子ども食堂の数が増えてきて、農園のすぐそばに子ども食堂がオープンすることが起きてきました。こうして、それぞれの農業体験農園が、それぞれの子ども食堂におすそわけをするという形に変わっていききました。

石神井ゆうやけ子ども食堂

- * 「なゆたふらっと」と「野の花伝道所」の共催
- * 2014年12月より食堂をスタート
- * 月2回(第1金曜、第3日曜)開催
- * 2019年7月までに延べ103回開催。
- * 毎回40名~50名の子どもと大人が参加。
- * 子どもだけでなく、高齢者の参加も多い

現在、緑と農の体験塾では、「石神井ゆうやけ子ども食堂」と、練馬駅近くにある「桜台子ども食堂」に野菜をおすそわけしています。この2つの子ども食堂をご紹介しますと、「石神井ゆうやけ子ども食堂」は、不登校の子どものための居場所づくりを行っている「なゆたふらっと」という団体と、心の病を抱えた方の居場所

づくりをしている「野の花伝道所」の共催でスタートしました。練馬区で一番早い2014年の12月より活動を始めた子ども食堂です。月に2回、第1金曜日と第3日曜日に開催し、毎回40名から50名の参加者が訪れるそうです。子どもとその親御さんだけでなく高齢者の方も多く参加しており、2019年7月までに延べ103回開催しています。

桜台子ども食堂

- 2015年10月：子ども食堂月2回(第2、第4火曜)
- 練馬区桜台の練馬バプテスト教会ホールにて開設
- 2016年7月：学校休業中の昼食事業を開始
- 2016年8月：宅配事業開始
- 2016年9月：学習指導事業を開始
- 2018年2月：一般社団法人 東京子ども子育て応援団設立

「桜台子ども食堂」は、2015年10月にスタートしました。練馬区と要保護児童対策地域協議会のメンバーの協力を得て、要支援家庭に限らず、セーフティーネットから漏れた困窮された家庭、困窮していなくても重荷を抱えておられる家庭、その他地域で応援が必要な家庭や子どもたちを対象として活動されています。2016年からは、子ども食堂以外にも給食のない夏休みの時期などの昼食の提供、食料支援パッケージの宅配、無料の学習支援なども行っています。

認定NPO法人 しんぐるまざあず・ふぉーらむ

1980年に発足 2002年よりNPO法人
当事者が中心のNPO
シングルマザーが子どもといっしょに生き生き楽しく生きられるように、勇気づけ、社会で活躍できる支援を行っている

- * 電話・メール相談 * 食料支援 * 親子野外イベント
- * 入学祝い金事業 * キャリア支援プログラム
- * メルマガ発信 * 出版事業 * 支援者養成
- * シングルマザー向けセミナー * 政策提言

そしてもう1つ、おすそわけを受けている団体が、私が今働いているNPO法人「しんぐるまざあず・ふぉーらむ」です。こちらの事務所では、ひとり親向けに電話相談を実施しています。



相談と連携した食料支援

おすそわけ野菜は米、食品、菓子などと一緒にパッケージ
電話相談などで繋がった支援が必要な世帯に随時、送付している
(月に7~8世帯)

困難を抱え孤立するひとり親家庭と繋がるきっかけとなっている

そこで、様々な困り事を抱え相談にきた方に対して、おすそわけ野菜を米、食品、菓子等と一緒に送付しています。野菜を送ることで、相手もつながりや支えを感じてもらい、困難を抱えて孤立するひとり親家庭と私どもが繋がる大きなきっかけとなっています。



共同畑で野菜づくり

- 2016年からは二つの子ども食堂と「しんぐるまざあず・ふおーらむ」が共同で体験農園に区画を借り、野菜作りを始める
- 3団体のスタッフや大学生、区民、食堂の利用者、会員などが作業に参加

おすそわけ活動の2年目から、この2つの子ども食堂と「しんぐるまざあず・ふおーらむ」と共同で農業体験農園内に畑を借りて野菜作りを始めました。それぞれの団体のスタッフや大学生や区民のボランティアが作業に参加しています。



・月3~4回、体験農園の講座開催と子ども食堂の開催日に合わせて作業。
・収穫した野菜は3団体でシェア。
・2018年からは共同の畑は2区画に。

共同畑の作業は月に3、4回、農業体験農園の講座や子ども食堂の開催に合わせて、日曜日の午前中を中心に行っています。収穫した野菜と利用者からいただいたお野菜を合わせて、3団体でシェアする形になっています。



子どもたちも農作業に参加

- 子ども食堂を利用している親子も農作業に参加
- 食堂で食べる野菜を自分で種をまき、手入れし、収穫する経験は、子どもにも大人にも発見と喜びがあるリフレッシュと食育の場となっている

子ども食堂に来ている親子や、「しんぐるまざあず・ふおーらむ」の会員の親子も作業に参加してくれることがあります。子どもも大人も、食堂で食べる野菜の種を自分で撒き、手入れをして収穫する経験は、発見と喜びがあるようです。中には嫌いだった野菜が収穫体験をすることによって食べられるようになったという子どももおり、食育の場にもなっています。



農園のイベントにも参加

農園の食事会や夏祭り、収穫祭などに子ども食堂の子どもたちやスタッフも参加。
農園利用者の方々と交流も生まれている

石神井ゆうやけ子ども食堂を運営する、「なゆたふらっと」は、不登校の子どもの居場所づくりを行っている団体ですが、畑作業を体験学習のひとつと位置づけ、子どもを農園に誘ってくれています。3つの団体が共同作業するようになって4年目ですが、農園の様々なイベントにも、子ども食堂の参加者や「しんぐるまざあず・ふおーらむ」の会員の親子やスタッフも参加するようになり、農園の利用者の方々とともに交流が生まれています。共同区画も去年から2区画に広がりました。

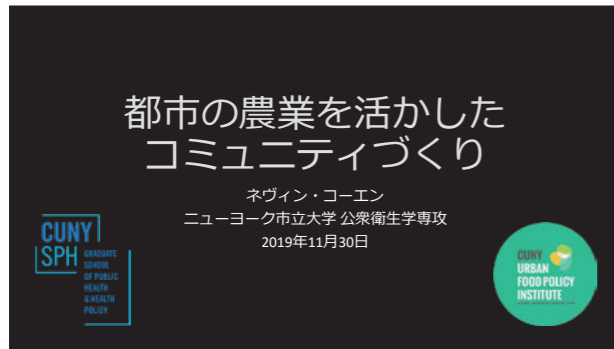


野菜のおすそわけ活動は、支援のための食材を生産して提供するという、「畑のフードバンク」とも言うべき役割を果たしています。しかし、それと並んで大きな意味があると思うのは、同じ地域にありながらそれまで出会うことがなかった市民活動やグループが、農業体験農園という場で出会い、繋がるきっかけになっているということです。農業体験農園は、地域の人と人、活動と活動を繋ぐコミュニケーションの場として、まだまだ可能性を大いに秘めているのではないかと、今改めて強く感じています。

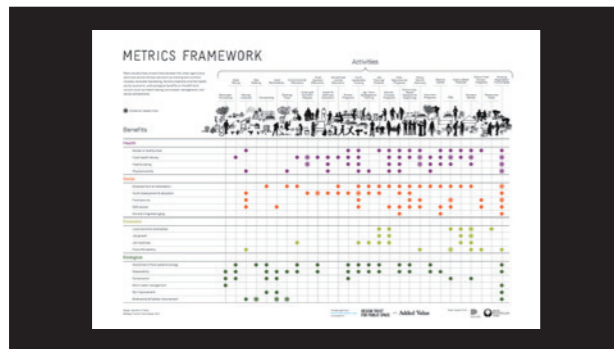
分科会②

ネヴィン・コーエン / ニューヨーク

ニューヨーク市立大学大学院 公衆衛生学専攻 准教授



皆さんこんにちは。ネヴィン・コーエンと申します。ニューヨーク市立大学で教授をしており、都市農業の研究をしています。



都市農業において重要なことは、単なる食料生産だけでなく、それ以上の便益があるということです。都市農業というのは色々な活動があります。食料栽培から収穫、販売、若い人々へのビジネス訓練、そのほか場所を提供し老若男女が集まって色々な活動ができます。

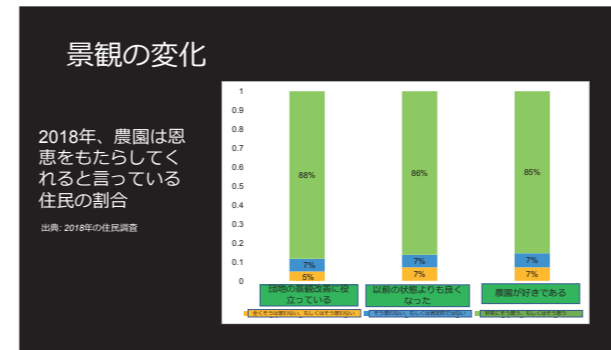
ここにあるチャートには、あらゆる活動が都市の農園でできること、またその便益（恩恵）について書かれています。健康、社会的・経済的・生態学的便益といったものが都市農業から得られますし、こうした便益と都市農業の活動の関係性が分かります。ここから得られる重要な教訓とは、私たちはこれらの活動を測定していく必要があるということです。我々の農園における活動において、我々が享受する便益というものを定量化することが重要なのです。



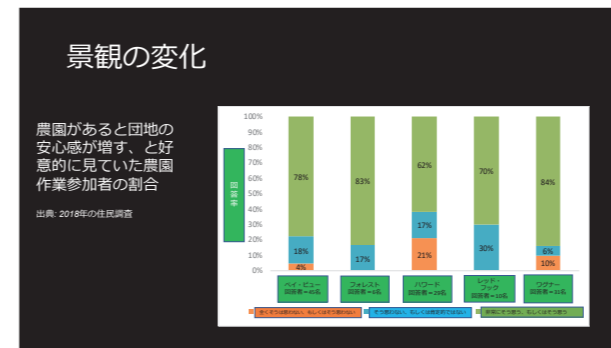
4つの異なる便益およびニューヨーク市の事業について話をします。1つは社会的発展です。コミュニティへの関わり・結束が重要です。



こちらは、4年間研究している NYCHA 農園事業です。NYCHA というのは、ニューヨーク市住宅公社のことであって、公共住宅を作っています。最貧困層の方は50万人位おり、この数はほぼ練馬の住民の数に匹敵すると思います。彼らは非常に密集した団地に暮らしています。敷地の真ん中にオープンスペースが数多くあって、住宅公団・市役所・連邦政府が連携し、若年層が雇用に結び付く技術を身に付けられるような研修を実施しています。グリーン・シティ・フォースという NPO 団体が、公共住宅内に6つの大型都市農園を作りました。



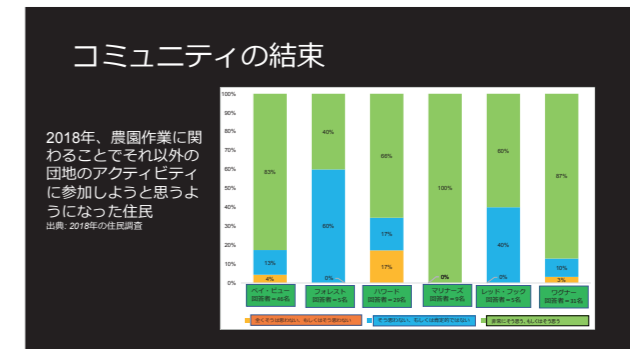
こうした農園がどのように公共住宅の環境を変えているかを私たちは評価してきました。この表は、農園があることで団地がどれだけ改善されたかを、住民を対象に調査したものです。これによると、農園によって住民に良い効果が生まれているという結果が出ていることが分かります。これは非常に重要な指標です。住民の住環境が良くなり、心地良く生活できるといった良い効果が生まれているという、大変前向きな結果が出ていることは、公的住宅において生活の質が様々な面で改善されるということです。こういったことは、都市農業が単なる食料生産以上の効果があるということの表れです。



これも我々が行った調査ですが、都市農業事業の参加者の比率を表しており、農園があることで団地内の安心感が増すという結果が出ています。この理由はまだはっきり分かっていませんが、より多くの人が農園に携わり、見守っているからなのか、その他の要因があるのか、様々な理由が考えられますが引き続き調査中です。



さて、農活動を通じて農への参画が生まれますが、これは全 NYCHA 農園にて週1回開催される直売所の様子です。NYCHA 農園の農産物を団地住民に無償提供をしています。なぜなら、ニューヨーク市のようなまちにおいては、非常に裕福である反面、5分の1から6分の1位の住民つまり120万位の住民は、食料の保障が十分ではないと言われているのが理由の1つです。つまり、果たして次の月にも食事がテーブルにのるのかどうか分からないと答える人がいるということです。従って、食料安全保障というのは大きな問題になっています。アメリカの他の多くの都市でもそうですが、ニューヨーク市では15~20%位の人がフード・スタンプに頼っています。つまり、連邦政府からの食料支援を受けているということです。貧困は、特に黒人やラテン系の人たちにとって大きな問題です。人種が大きな社会問題なのです。たくさんの方がこの直売所を訪れボランティアが関与していますが、特に若い人たちがこの公共住宅にいて、賃金を得ながら農業者として訓練を受け、料理研修など様々な活動や直売所の運営にも携わっています。農園は、公共住宅の住民が関与し、若い人たちが訓練を受けて職を得るための技能を得ることができるという、非常に重要な側面を表しています。



もう1つ分かったことは、このような農園活動によって、団地の他の活動にも参加しようと思うようになった人が増えたということです。

農園に関わることで、例えば子どもたちがデイ・ケアの事業に関与したり、ボランティアの人たちが高齢者に食料を提供したりと、様々な側面に関わることで、コミュニティの結束が強まるのです。単なる都市農業だけではなく、都市農業の事業を通じて、結果として住民同士の関係が強まる、コミュニティの結束が高まっていくということが示されています。

農作業とリーダーシップ研修

- 111 団体会員
- 97% が卒業
- 100% が料理研修終了
- 96% が卒業後半年以内で正社員就職または学校入学
- 自信を取り戻し人とのコミュニケーション能力が改善した若者もいる



都市農業を通じた研修も行われていますが、NYCHA 農園事業では、食料栽培だけではなく、若者がリーダーシップをとれるような研修を行います。雇用訓練を行って 97% が卒業し、100% が料理研修を修了しました。ほぼ全ての人が卒業後半年以内に正社員として就職もしくは学校に入学しています。自信を取り戻しコミュニケーション能力も改善した若者も多くいます。若者が農業者になるための訓練ではありません。もちろん都市農業の組織に入る人もいますが、このような訓練を受けることで多機能的技能が高まります。どのような機関に就職するとしても、問題解決・理解力・基本的なビジネス理解といった能力は非常に重要です。

起業家精神



都市農業は、企業家精神にとっても重要です。この動きはニューヨーク市において新たな分野で大変活気付いています。これは「スクエア・ルーツ」という企業の写真ですが、船舶のコンテナの中で野菜を育てています。出資したのは、イーロン・マスクという設立者の兄弟でもある実業家で、NYCHA 農園事業の卒業生がこのビジネスを始めました。マイクログリーン（若芽野菜）をレストラン等に出荷しています。

起業家精神



都市農業とは通常とは異なり、施設の中あるいは屋上で農業を行っています。この写真はインキュベーターで、若い人たちが新しい起業ができる場所です。特別なフード・プログラムがあり、その一つに「スモール・ホールド」というものがあり、機器を使って栽培した作物をレストランに販売したりしています。様々な雇用に繋がっており、この点も都市農業の重要なポイントです。

2. レジリエンス

グリーンインフラ、ブルックリン・グランジ、ガーデン・ライジング

2つ目はレジリエンス（強靭性）という点です。都市農業は、グリーン・インフラでもあります。東京と同様、ニューヨーク市では雨が降ると氾濫してしまうことがあります。従って、土地をより水の浸透性の高いものにすることが重要になります。



この点は優先課題でもあります。屋上に農園を作ることで水を吸収させ、周りに水が溢れないようにします。これはレジリエンスを補強する戦略と言えます。

栄養・健康状態の改善

- 農園から出荷した新鮮農産物は 119,000ドル相当、56,714 ポンド
- 料理教室では新しい技術を伝授
- 一世帯当たり6.3ポンドの野菜。必ずしも多くはないが...
- 農園で作られた野菜を手に入れるということは、たくさんの野菜を食べることを意味する、と46%の住民が言っている。



小さな農園で食料を栽培していますので、生産量はそれ程多くはなく、出荷量は5万6千ポンド（約2万5千kg）程です。これは一世帯あたり6.3ポンド（約2.8kg）程度です。しかし調査によると、住民は農園で新鮮な野菜を手に入れることでより野菜を食べるようになり、子どもたちも野菜を喜んで食べるようになったという結果が出ました。つまり、量だけが問題なのではなく、野菜が新鮮なので人々が喜んで野菜や果物を食べるようになったという効果が出ているのです。またここでは、料理教室で野菜の食べ方を学ぶことができます。新鮮な野菜が人々に行き渡ることもそうですが、練馬にあるような野菜の自動販売機が本当に必要なのだと思います。

2. 経済的發展

研修、起業家精神、雇用の創出

経済的發展についてお話しします。都市農業の非常に重要な便益の1つです。



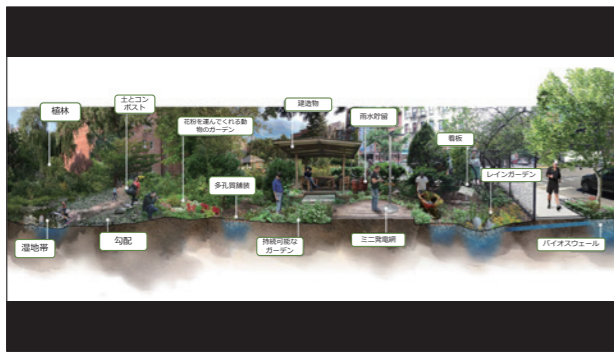
ニューヨーク市の地域における水の氾濫対策としては集水システムを設置しました。コミュニティ農園に灌漑用に設置して、雨水を利用できるようにしました。



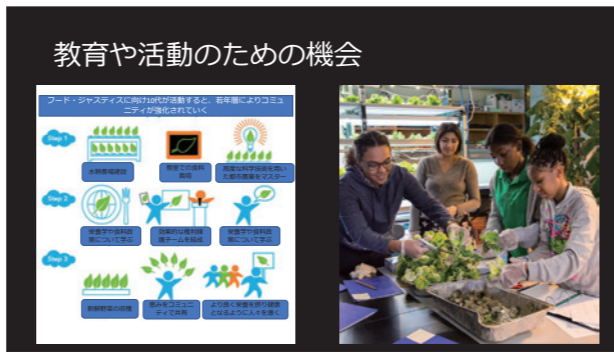
「ガーデンズ・ライジング」という事業もあります。洪水の被害を受けないために、全てのコミュニティ農園にグリーン・インフラを作ろうというものです。



資金を提供し、農園が水をもっと吸収して下水の機能を高めるようにする事業です。



コミュニティ農園がそういう機能を持つことによって、個々の農園は小さなものではありませんが、大きなインフラとして機能でき、人々をハリケーンから守ってくれるのです。気候変動によってより頻繁に被害を受けるようになっていきますので、洪水から守ってくれるレジリエンスという点も都市農業の重要な側面です。



「チーム・ジャスティス」と呼ばれる事業があります。これは、若い人たちにソーシャル・ジャスティスを教える新しい機会となっています。学校と連携し水耕栽培の施設を作ることを目指していますが、それだけではなく、なぜ自分たちの地域は貧困で家族は食料に困窮しているのか、どのような政治的な関与が必要となるか、家族や地域のためにどのようにシステムを変えていく必要があって何を学ばば良いのかを、若者に教育する場にもなっています。つまり、都市農業はソーシャル・ジャスティスを教育する手段としても大変有益であるということです。

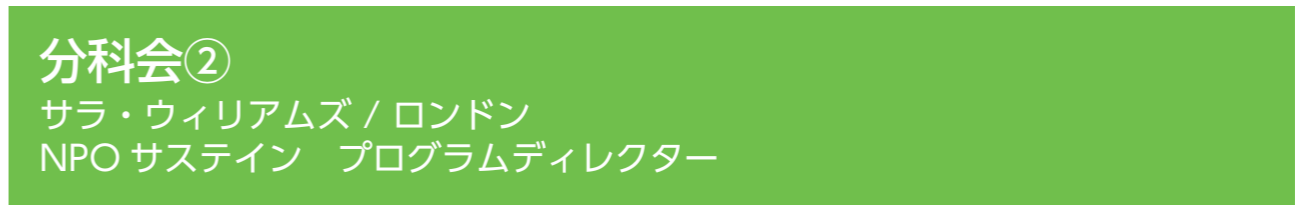
ご清聴ありがとうございました。



最後はソーシャル・ジャスティス（社会的公正）です。農園というのは政治的組織化づくりのためのスペースでもあります。



これは「フレンズ・オブ・ブルック・パーク・コミュニティ・ガーデン」で、政治的組織を作ることにも実践しています。住宅、失業、人種的公正さといった課題に対処するため農園に多くの人が集まり、重要な場となっています。



サラ・ウィリアムズと申します。NPO サステインという所で仕事をしており、今年20年目を迎えます。食料と農業についてイギリス全土で活動を展開しています。本日は、その中でも特にここ10年間行っている「キャピタル・グロウス事業」という活動についてお話ししたいと思います。「キャピタル」と聞いて、資本やファイナンスを思い浮かべた方もいらっしゃるかもしれませんが、この場合は「首都」という意味であって、「首都から食料を」という意味です。まず、この素晴らしい練馬にお招きいただき感謝を申し上げます。ここ2日間練馬で過ごしていますが、都市農業の取組に非常に感銘を受けています。少し羨ましい思いも抱いています。農業がコミュニティと結び付けられており、本当に素晴らしいと思います。私の近くでも、このような都市農業を経験できる機会があるのであれば、是非申し込みをしたい、と考えています。今度ロンドンで、そのような取組を開始したいと思っています。



本日の内容についてですが、「私たちが取り組んだことについて」「なぜそれを行ったのか」「どういった違いが生まれたのか」、また最後に少しだけ「どのようにして行ったのか」をお話したいと思います。

ロンドンというのは、大変な大都市であって、800万人近く人口がいます。東京ほどではありませんが、非常に大きな都市です。33の行政地区に分かれ、それぞれ地方自治体が管轄しています。また、ロンドン市内と市外で分かれており、ロンドン市内の方が、より人口密度が高く、緑が少ないという特徴があります。一方、市外は緑地が多く農地も多いです。どちらかと言うと練馬はロンドン市外に近いのではないかと思います。非常に多様な文化があり、多くの言語が話されています。

また市内では、多くの課題に直面しています。住宅の価格の高騰といった住宅問題のほか、医療の問題もあります。特に子どもの肥満も問題になっています。不健康な食文化、ジャンクフードが多く消費されていること等が原因です。また、不平等・格差も問題になっています。貧困層が拡大する一方、富裕層はより豊かになっており、犯罪の問題もあります。そしてメンタル・ヘルスの問題があり、人々が孤独感を抱えているという問題もあります。これは高齢者だけではなく若い住民の間でもそのような孤独感があり問題視されています。そのような問題を受けて、このコミュニティ内での食料栽培という活

動に繋がっていきました。

なぜ食料栽培をするのか？

- 地域の環境
- 使用されなくなった土地の開墾、再利用
- 地域社会の発展
- 地域への想い入れ
- 健康と福利
- 教育と技能

なぜこの事業を行っているのかについてご説明します。ロンドンの文化的な背景を考えると、私たちの都市農業は、よりコミュニティのためにに行っていると言えます。練馬の都市農業とは少し違った特色があります。住民の80%が私たちのネットワークに関与していると言われています。

活動に参加する理由としては、健康や福利のため、より良い住環境を得るため、コミュニティ内での発展を目指すためが挙げられます。この活動に参加することで、近隣住民との絆が強くなったと感じている方は72%にのぼるそうです。

もう1つ重要な機能があります。生物多様性や自然環境の保全という点です。生物多様性の問題や自然環境が失われているという問題があり、70%の事業を通して、例えば蜂にとって良い植物を植えるようにするといった活動を行っています。また、イギリス全土で環境保全の機運が高まっています。人工的な肥料や農薬を使わない有機栽培に関心を持つ人も多くなっています。

壮大な企画...

2012年末迄に新規で2,012のコミュニティ農園を開設すること

- 自分の食料を育てることへの関心
- ロンドンに対するまなざし - 2012年のオリンピック
- 土地へのアクセス
- 助言と支援
- 政策や決定権のある者に影響を及ぼす

10年ほど前に、壮大な計画を作りました。2012の新しいコミュニティ農園を2012年末までに作

るとい計画です。2012年はロンドンオリンピックが行われた年です。自分で自分の食料を栽培するという関心が高まっていたにも関わらず、土地が十分にはありませんでした。また、市民農園がロンドンにはありますが、ウェイティングリスト(待機リスト)に登録している方がたくさんいて、何年経っても農業を始められない状況でした。どれだけ土地を食料栽培のために活用できるか、どれだけより多くの人々を農業に関与させることができるか、必要な訓練を実施できるかといったことを確認したかったのです。

これがどのように政策に影響を与えるのか、都市内でどのような政策決定がされるのかにも注目しました。また、最も貧困を抱えている人たちにも焦点を当てたかったのです。先程多様なコミュニティがあると申し上げましたが、食料栽培を通して、教育機会の提供や犯罪の根本的な原因に対処したいという考えもありました。



ここから... + 地域の熱意 + 土地利用許可 + 500ポンド(約65,765円) =

実際に現場で何を行ったのかについてですが、使われていない土地を活用することから始まりました。これはその例で、バックロード・グリーンと呼ばれるロンドン西部にある土地です。私の実家のすぐ近くにある所ですが、マンションの隣の使われていない土地で、地元住民の間で、不法投棄や若者のたまり場になっては困るため、何とか活用できないかと考えられました。この土地を所有している機関から許可を得て、500ポンドの出資をして美しい農園に変えました。



農園番号 68: クランブルック・コミュニティ農園

このサニーという男性は、もう亡くなってしまいましたが、当時95歳でした。この農園が建設されている時は1人で自宅にこもっていたのですが、昔、市民農園を利用していた経験を活かし、この事業開始以降は農園に頻りに顔を出してくれるようになり、他の利用者にも指導をしてくれるようになりました。また、この左側の女性は、ロージー・ボイコットといますが、重要な役割を担いました。ロンドン食料委員会の理事を務めていましたが、私たちの活動のことも非常に支援してくれ、実際に参加もしてくれました。

活動規模

- ロンドン市内中
- 多くの人による参加
- 高い注目度
- ワンストップショップ
- ITシステムと地図

また、私たちキャピタル・グロウスのネットワークのもう1つの要素としては、活動の規模を拡げていくということがありました。先ほど、2012年末までに2,012の新規農園を作るという目標があったとお伝えしましたが、ロンドン市内全土に広めたいと考えていました。そして、ワンストップショップとして、何か質問があったとしてもここに来れば回答が得られるというサービスを目指しました。以前でしたら、質問があったら5~6人の間をたらい回しにされて回答を得るという状態でしたが、キャピタル・

グロウスのチームに聞けば何でも分かるという体制にしました。この図は少し古いものですが、数年前に、この2012の農園において10万人が参加するというマイルストーンを達成しました。そしてここに69のサッカー場に相当するエリアとありますが、今ではこれよりもはるかに大きな面積の土地が農園として使われています。

我々の関心事

- 包括的かつ「試行錯誤」的アプローチ
- 障壁を取り除くこと
 - 農園へのアクセス
 - 少額助成金
 - 助言と研修

彼女はエドナという女性ですが、私たちの農園に来る子どもたちにとって「おばあちゃん」のような存在です。

私たちの取組では、まさにこうした「包摂性」というものを大切にしています。コミュニティ農園や食料栽培スペースを作る時には、その基準をなるべく低く設定しています。もちろん、一義的には食料生産を目指していますが、それよりも、一緒に食料を栽培することで、人々が繋がることを目指しています。もちろん、試行錯誤のアプローチ、何か1つ上手くいかなかったら別の方法を試す、ということを繰り返してきました。リスクを取り、ネットワークの中にいる人たちを活用して、手探りで取り組んできました。

また、食料栽培においてできるだけ障壁を取り除くことを目指しました。まずは、土地へのアクセスや、少額助成金を出すことで必要な農機具や堆肥、種を買えるようにしました。ロンドンが抱えている大きな問題の1つに、以前の産業化の影響で、土地が汚染されているということがあります。そのため、きちんと堆肥を使って、盛り土をして植物を栽培しています。

また、研修事業も展開しており、年間500人がこの研修を受けています。さらには、多様な人々へも機会が与えられるように、信仰上のグループや住宅管理者といった様々な機関とも協力し合っています。



様々な動機

- 学校のコンテスト
- 食料農園
- 健康と福利
- 信仰上のグループ
- 研修と技能

こうした事業を通して分かったことは、食料栽培の動機は実に多種多様であるということです。もちろん、個人的に色々な理由があると思いますが、それぞれ違っているでしょう。こういった様々な動機を捉えることで、より多くの人に参加してもらえるようにしました。例えば学校でコンテストを行ったり、公共住宅の住民にも食料栽培を経験してもらうエディブル・エステートと呼んでいる事業を行ったりして、食料栽培がいかに健康や福利に繋がるのかといった啓発活動をしました。先程もお伝えしたように、信仰上のグループとも協力して事業を実施しています。そして研修をしたり技能を身に付けたりすることで、雇用に繋がるようにしています。また、小規模な農園や区画で栽培している人、市民農園で栽培している人等様々な人がいますが、かなりの人数のボランティアを動員して、常に人と一緒に作業をするようにしています。



政治的支援およびその他の支援

- 市長支援
- 地域支援
- 行政
 - 資金
 - 統計データ
 - 公開性

市長や地域、行政からの支援も受けています。これらは資金調達、事業の公開性を保つこともできます。

地域による活動

- 小規模NGOと共に取り組む
- 地域的なイベントを実施する
- 地域の住宅提供者と接触する
- 現場に目を向け耳を傾ける



その他に様々な団体とも連携し合っています。ロンドン全体をカバーしていますので、NGOやNPOとも協力しています。現場では、そういったNGOやNPOが地域的なイベントを主催しています。この写真にもありますように、晴れた日にはこのように屋外で楽しい時間をみんなで過ごしています。草の根レベルの団体を通して、口コミによって私たちの活動も広まっています。



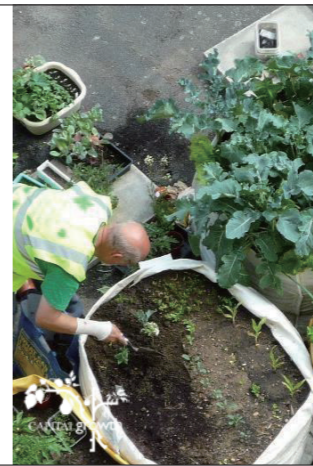
コミュニティをひとつに

- 物理的なスペース
- 課題の共有
- 多様性の尊重
- 友好促進

人と人を繋げる、コミュニティをひとつにするということが大切なことです。物理的なスペースを共有し、課題を共有し、共同作業を通して多様性を尊重するということを重要視しています。また、食べ物を食べ、各国の色々な食事をし、そしてこの農園を通して友好的な関係を促進しています。

コミュニティをより強く

- 土地を開墾し、耕作可能な状態にする
- 目と耳を向ける
- 安心感をさらに得る
- つながりを築く



この活動を通して、コミュニティがより強くなっているということが分かりました。土地の再利用も可能になっていますし、安心感を与えています。先ほどの発表にもありましたが、人と人が繋がる、近隣住民のことをお互いが知ることによって、安心感を得ることができているのです。



人々への支援

- ボランティア活動
- 研修
- 関係組織
- 自発的部門の支援

また、ボランティア活動のため、多くの人に関わってもらいながら、このボランティアの部門も拡大してきています。様々な農園を通して地域社会への貢献へと繋がってきています。

学んだこと

- 予算は少しで十分
- 土地 - 公有地主
- ボランティア
- 地域の独自性を携えた広範囲な運動
- ITシステム



私たちは様々な資料を発行しており、私たちが得た教訓等をまとめています。まず、予算は少しで十分であること、特にこういったコミュニティ農園に関しては、あまり多くは必要ありません。

次に、ロンドンという土地を考えた時に、公有地の所有者と一緒に協力することが重要です。さらに、ボランティアをいかに関与させるのか、ボランティアなくしてコミュニティ農園の活動はできませんので、ボランティアを動機付けるといえることが大切です。

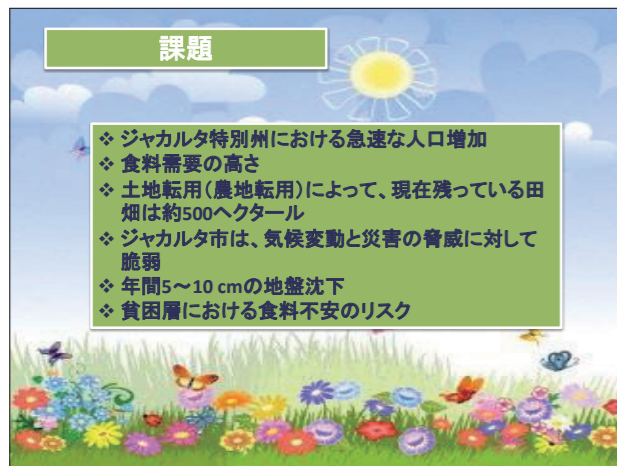
また、こういった運動は全国的に広がりましたが、それでも地域の独自性・アイデンティティというものを持ち続けています。そしてITシステムも導入しています。コミュニティ農園で全ての問題が解決できるかは分かりませんが、農園で時間を過ごす、人と人が繋がるといった経験は大切であると考えています。以上です。どうもありがとうございました。

分科会②

ディア・メイディアンティ / ジャカルタ
チトラ・ナガ・チュムラン社 植物防疫研究所長



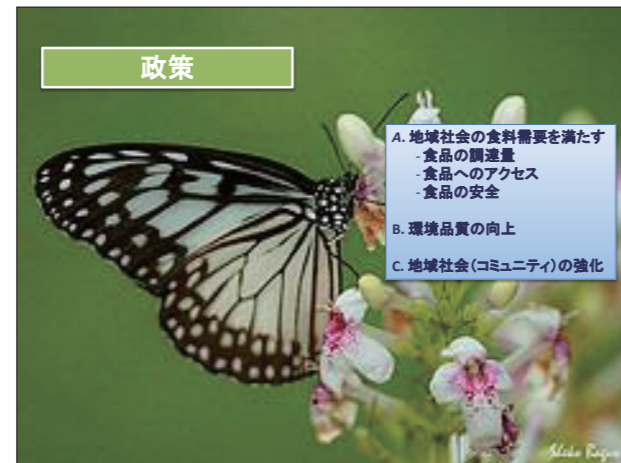
こんにちは。このような機会を与えていただき、ありがとうございます。私はジャカルタから参りましたディア・メイディアンティと申します。



なぜジャカルタで都市農業を実施しているのかを説明したいと思います。背景には、ジャカルタが抱える課題があります。

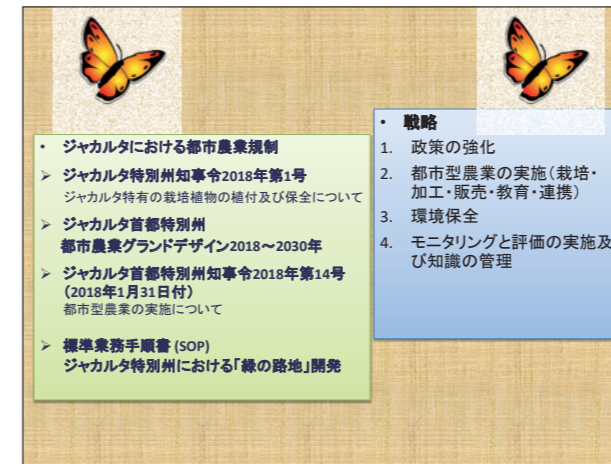
1つ目は、ジャカルタにおける急速な人口増加です。そして2つ目は食料需要の高さ、3つ目は土地転用(農地転用)です。ジャカルタで現在残っている田畑が、たったの500ha程であるということは大きな問題です。農地が少なくなり、これだけの面積しか残っていないのです。ジャカルタは、特に気候変動や災害に対して脆弱な都市で、地盤沈下も毎年5センチから10センチ進んでいるというのが現状です。他にも、貧困層における食料不安のリスクがあります。ジャカ

ルタでは、このように沢山の問題が発生しているという背景があります。



具体的に挙げた中で、食料保全是大変重要な課題です。私たちの政府、ジャカルタ首都特別州の政策として、まずは、地域社会の食料需要を満たさなければなりません。その中で、食料保全、食料へのアクセス、そして食料の安全性に対処することが必要です。ご存知のように特に重工業の汚染が深刻なので、食料が安全であることはとても重要です。

そして環境改善ですが、環境問題が深刻で汚染も悪化しており、良好な環境の維持が重要だということは皆が理解しています。ジャカルタの環境維持のためには、地域コミュニティとの関わり強化がとても大切です。地域コミュニティの人たち自身もそれを理解した上で、政府が政策・対策を考えることが重要だと思います。

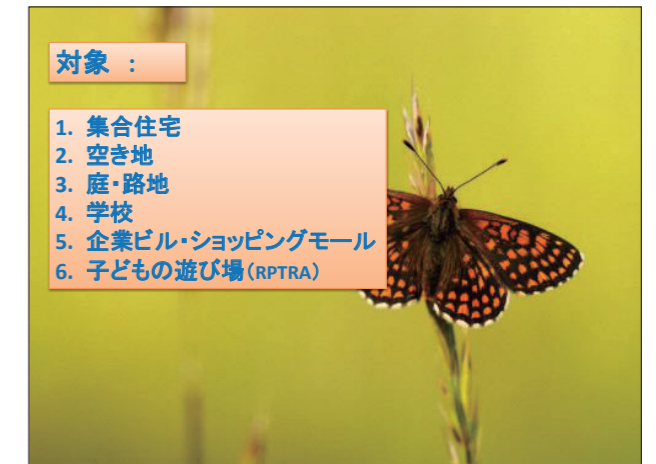


こちらに、ジャカルタ首都特別州政府の法整備関連について具体的に挙げました。「ジャカルタ首都特別州知事令」が2018年に発令され、その中に、ジャカルタ特有の植物の栽培方法やその保全について明記されています。ジャカルタ特有の植物を住民が保全していくよう、州知事による規制で定めています。

また、「ジャカルタ首都特別州都市農業グランドデザイン2018-2030」においても土地計画が明確にされています。政府から支給されるものには、苗なども含まれます。住民はIDカードを提示すれば、1人2株の苗を無料で手に入れることができます。住民が自分の家の周りで植物を栽培する場合、個人には2株、団体には数株の苗や種が支給されます。

2018年から2030年までを対象とする、政府による都市農業に関する具体的な計画が作られ、その中には都市農業の概要や意義が明記されています。さらに、2018年第14号の州知事令においては、都市農業の実施について具体的な記載があります。ここでは、特に政府の役割や住民の関わりについて書かれており、「実施にあたっては全てのステークホルダー(利害関係者)が参加すること」と明記されています。そして、そのためにガンヒジョウ(緑の路地)という取組をどのように実施するかということが「標準業務手順書」に書かれています。

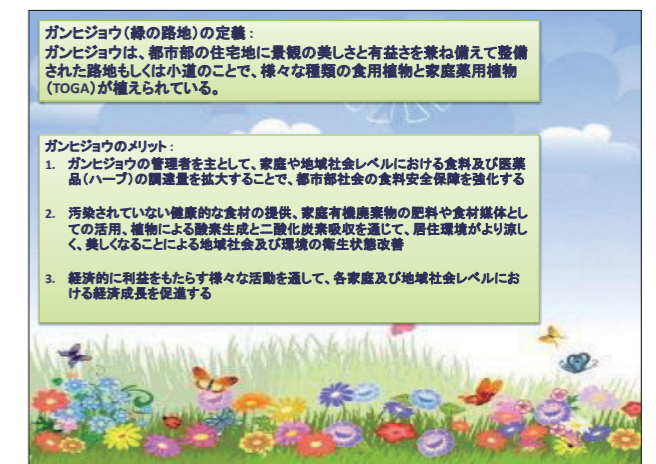
これらの法整備のもと、政府が実施する戦略を右に記載しています。政策の強化、住民にどのように栽培を行ったらよいのかという方法を理解させること、政府の役割も具体的にすることが大切です。農産物の販売などで連携することも戦略の中に入っており、必要な時には政府が住民を指導します。他に、環境保全、監視と評価がありますが、中でも知識管理を行うことは大変重要な要素だと考えています。



実施する対象は、集合住宅、空き地、庭・路地(緑の路地)、それから学校などの場所になります。



政府が、グランドデザイン2018-2030のなかで掲げている3つの目標がこちらです。



ガンヒジョウ(緑の路地)というのが、どんな内容なのかを説明します。定義は、都市部の住宅地に景観の美しさや有益さを兼ね備えて整備された路地もしくは小道のことで、様々な種類の食用植物、家庭薬用植物が植えられているという概念です。




・ガンヒジョウ(緑の路地)の実施状況

- ・ 2016年 = 150か所
- ・ 2017年 = 77か所
- ・ 2018年 = 160か所
- ・ 2019年 = 160か所
- ・ 2020年 = 160か所

ガンヒジョウ(緑の路地)プログラムの実施状況ですが、2016年には150カ所に実施されました。2017年に77カ所、2018年には160カ所において既に行われ、今後はこのような予定で行います。政府は住民の取組を支援しています。

ガンヒジョウプログラムの実施状況

栽培植物の種類

サツマイモ、シンコン(キャッサバ)、サトイモなど炭水化物源となる食用植物


ほうれん草、空心菜、白菜、チンゲン菜、ケール、赤ほうれん草、からし菜、カイラン菜、レタスなど葉物野菜

唐辛子、ナス、トマト、ゴーヤ、トカヘチマ(オヨン)、瓜、エシャロット、ネギなど果菜類

クミン、ツボクサ、コリウス(赤葉蘇)、パンウコンなどハーブ植物

この(都市型)農業には、鳥類、ウサギ、ヤギ、魚などの畜産業と水産業も含まれる。

ガンヒジョウプログラムの実施者:
 ギンヒジョウの近隣に居住している個人もしくは団体で、家庭や地域社会に利益をもたらす路地及び小道を築こうという展望と使命を持つ人々



次に、どのように実施しているかということですが、例えばサツマイモなどがここには書いてありますが、色々な食料を栽培しています。これらの植物の種子が、実際に住民に無償で配られています。



この写真は野菜ですが、実際のガンヒジョウ

の写真になります。肥料の入れ方や修理の方法なども、政府の方から説明が行われています。



ガンヒジョウはこのように行われていて、水耕栽培技術(ハイドロポニックス)も活用されています。この水耕栽培技術の開発によって、このように狭いところでも沢山の野菜を植えることができます。



こちらは収穫の写真です。住民が近所でお互いに手伝ったりしている風景です。このように、住民がお互いに仲良く活動して、地域コミュニティがうまく維持されています。

このように住民が関わる場所において、最近では自分たちの食料だけでなく、販売目的としても成り立つようになってきました。特に小さなレストランや食堂に販売できるようになるなど、経済的な利益も生んでいます。

私からの発表は以上です。ありがとうございました。

分科会②

イ・チャンウ / ソウル
 韓国都市農業研究所長

ソウル特別市における都市農業の推進現況と今後の課題

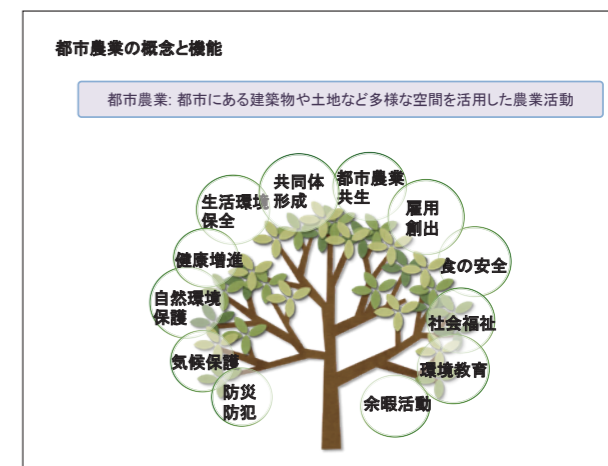
イ・チャンウ / 韓国都市農業研究所長

私は、韓国都市農業研究所の所長を務めている、イ・チャンウと申します。この施設は、全国の都市農業市民協議会に附属している研究所です。この協議会というのは、市民団体の連合であって、2012年に立ち上げられました。メンバーは64団体、3万4千人います。都市農業に関連する市民団体は、韓国にこれだけたくさんあるということです。

目次

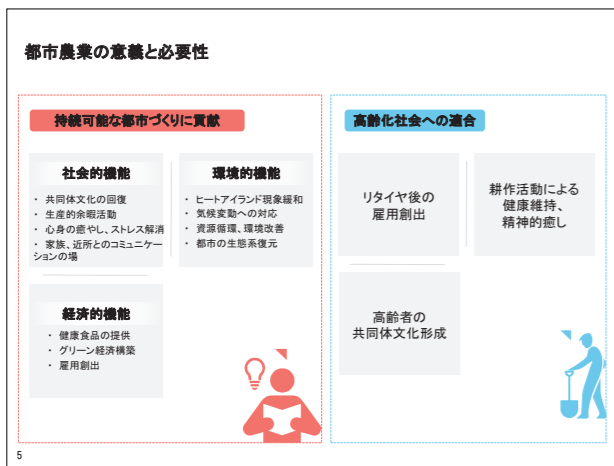
- 意義と必要性
- ソウル特別市の都市農業の推進現況
- 今後の課題

皆さんにお話ししたい内容は、なぜソウルで都市農業を行っているのか、その意義と必要性、都市農業の現状、そして最後に課題について報告します。



ソウルでは、都市農業について、非常にシンプルに「都市にある建築物や土地など多様な空間を活用した農業活動である」と定義しています。昨日練馬の都市農業の現場を視察しましたが、学ぶ点も多かったですし違いも大きいと思いました。

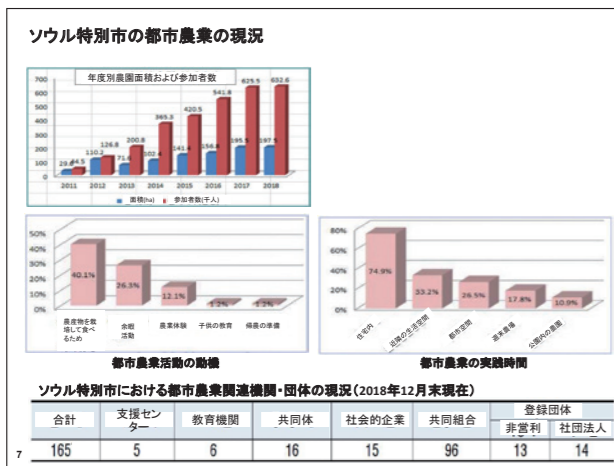
こちらの図は、ソウルが重視している都市農業の機能と言われるものです。ここでポイントとなる3つを選ぶとしたら、まず「共同体形成」です。次に「雇用の創出」です。都市農業によって、雇用を創出しようという意図があります。ソウルはこれを大変重視しています。3つ目は「教育」です。例えばソウルでは、小・中・高校1,400校ありますが、その中の1,000校に学校農園があります。規模は小さいですが、子どもたちに農業を教えるという点で大変有効であり、学校ごとに農園があります。



そして都市農業は、持続可能な都市づくりに大きく貢献すると言われています。社会的機能が期待され、共同体文化の回復といった点でも有益なことからソウルでは重視しています。

次は環境です。最近、この環境問題への関心が高まっており、とりわけ屋上農園を作ろうという取組が非常に活発です。ソウルには605km²という面積に、1千万人以上の人口がありますが、練馬のような農地がソウルにはありません。外周部に若干あるのみです。そのため、建物の屋上を利用し屋上にたくさん農園を作ろうとしています。私どもは2年前に実態調査を行い、1,100か所の公共建物の屋上に農園が作られていることが分かりました。

次に経済的機能が意義として重視されています。ここでポイントなのは雇用の創出です。そしてもう1つ、高齢化社会に適合する良いツールが都市農業であると見なされています。韓国は日本同様、高齢化が非常に急ピッチで進んでいます。いわゆる退職後の働く場、あるいは高齢者の健康維持といった点で都市農業の意義が高いとソウルでは考えられています。

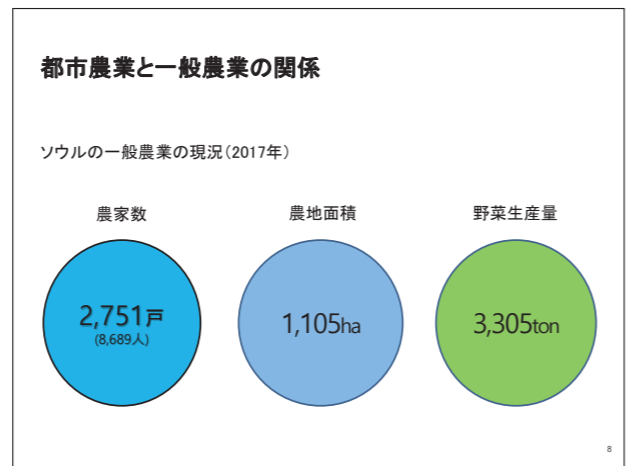


ソウルの都市農業の現状について説明いたし

ます。様々な統計がありますが、ポイントだけ押さえてと思います。左のグラフは、2011年からのソウルの農園面積です。ソウルではコミュニティ農園のことを「トッパ」と呼んでいます。グラフの赤い棒は参加者数を表していますが、彼らは「都市農民」と呼ばれています。2011年には4万4千人位であったところ、去年は63万人位にまで増えました。この方々は練馬とは非常に状況が違って、レジャーとして非常に小規模に農園活動を行っています。商業用のものはこれには含まれていません。

次に、グラフ内の青い棒ですが、これは面積です。2011年29haでしたが、去年は197haで、6倍以上に増えました。これは何を示しているのでしょうか。1,000人のソウル市民を対象とした2018年12月のアンケート調査によりますと、「なぜ都市農業をやるのか」という設問に対し、4割の人が「自分の食べる物を自分で作りたいから」と答えています。その次に多かった回答が「余暇」で、3番目が「農業体験」でした。では、どこでそうした農園活動を行っているのでしょうか。ソウル市民の5割以上は、集合住宅に住んでいますので、ベランダや屋上でやっているということになります。2番目に多いのが、自宅近辺の空き地であり、その後都市空間と続いています。そして週末は、日本で言うところの農業体験農園です。

ソウルには、都市農業関連の機関もたくさんあり、この中に「共同体」というものがあります。都市農業の共同体とは、5人以上の市民が集まって、100m²以上の農地が確保できれば「都市農業共同体」として登録することができます。「社会的企業」や「共同組合」は後ほど説明します。



練馬とソウルの大きな違いになりますが、農

業者の数は2,751戸であり8,600人程度です。これは商業として行っている専業の農業者の数です。面積は1,105haで、野菜の年間生産量は3,305tです。あいにく韓国では専門の農業者は、都市農業とはカウントされません。法律でそのように区分けしているのです。韓国の都市農業法では、趣味と余暇・レジャーだけが都市農業という括りなのです。そのため、皆さんの中には、こんなに多くの農業者さんがいるのか、と思う方もいらっしゃるかもしれませんが、この農業者さんと都市農業を行っている方々との間では、ほとんど交流がありません。



次に、江東区(カンドンク)という区をご紹介します。ソウルには25の行政区がありますが、江東区は、25の区の中で最も都市農業が発展している区です。東京でいうところの、練馬のような区と言えますが、あるのはコミュニティ農園です。このスライドの右の写真は、子ども食堂の写真です。

ソウル特別市江東区の都市農業タイプ別農園現況

区分	2010~2013	2014~2015	2016~2017	2018
区画	3,800	6,000	7,600	7,612
面積	68,704m ²	117,645m ²	151,916m ²	161,244m ²

区分	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
都市農園区画数	800	2,300	3,800	5,300	6,000	7,000	7,600	7,612

- 2018年の運営規模: 42箇所、7612区画、161,244 m²

区分	分譲農園	テーマ農園	民営共同農園	民間施設農園	地区住民センター農園
区画	1,817	30,427	1,297	1,827	426
面積	48,741m ²	30,427m ²	30,379m ²	46,577m ²	5,120m ²

- 運営原則: 環境にやさしい3NO農業の実践(化学肥料、合成農薬、ビニールマルチング)

- 農園タイプ

- 分譲農園: 江東区が直接分譲および管理。毎年年初に分譲者募集および選定(1世帯1区画が原則)
- テーマ農園: 江東区で直接分譲および管理。社会的起業者、高齢者農園および体験、実習中心のテーマ型農園
- 民営共同農園: 民間で分譲および管理し、農園共同体を構成。5世帯以上で共同体を構成。100 m²以上の農園を運営
- 民間施設農園
- 地区住民センター農園

江東区では、2018年には都市農園の区画が7,600となり、非常に急激に増えたことが分かります。江東区では農園のタイプを5つに分けて

います。まず1つ目が、区が分譲する分譲タイプです。これは毎年抽選で分譲されます。2つ目が、社会的弱者の方々のためのテーマ農園です。3つ目が、民営共同体農園で、5人以上から協力して作業できる民営のコミュニティ農園です。4つ目が、週末農園と呼ばれる民間の農園が沢山あります。最後に、地区の住民センターごとに持っている農園があります。



次に紹介するのが、去年オープンしました「都市農業ファームックスセンター」です。1階建ての建物で、種の図書館や、起業工作所、多目的講堂、ブック・カフェ等があります。都市農業のための専用施設で、ソウル初の試みでした。東京都にあたるソウル特別市が作れなかったものを、江東区が作ったということです。



「都市農業支援センター」と「シンシンドリウム」を紹介します。この写真は農産物の直売所です。1階に直売所、2階に農業支援センターがあります。江東区が都市農民を支援する活動と言えます。この建物の屋上には、やはり農園があります。江東区で収穫された野菜はここに運ばれます。そして残留農薬を検査し、それに

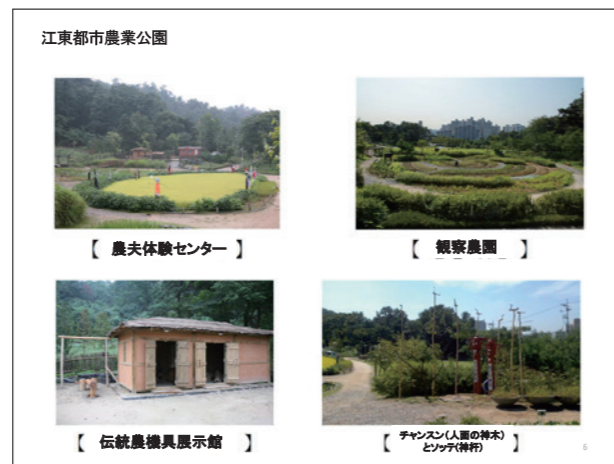
合格すると小分け・包装され、製品情報を登録されます。その情報の中には、誰がその野菜を作ったのか栽培者の名前が記されてから、販売されます。

ソウル特別市江東区の都市農業の中長期ビジョン(2019-2030)			
誰が幸せな暮らしの中の都市農業			
ビジョン	共に分かち合う江東		緑の健康な江東
目標	共に取り組む都市農業 (社会文化、協働)	豊かな都市農業 (経済、福祉)	明るい緑の都市農業 (環境、気候変動)
主要事業	<ul style="list-style-type: none"> 都市農業の価値共有、地域共同の活性化 社会的価値を増進させる都市農業 区民主導の都市農業 都市農業支援制度改善 都市農業教育・文化活性化 	<ul style="list-style-type: none"> 都市農業の雇用・仕事創出 都市農業分野の新産物育成 ライフサイクルに合わせた都市農業 共に分かち合い楽しむ都市農業 社会的経済単位の構成 	<ul style="list-style-type: none"> 未来型都市農業の基盤づくり 都市エネルギー問題への対応 循環型都市農業 都市の快適性向上 生物多様性増進 食糧型都市農業の遵守 緑やし型都市農業の活性化

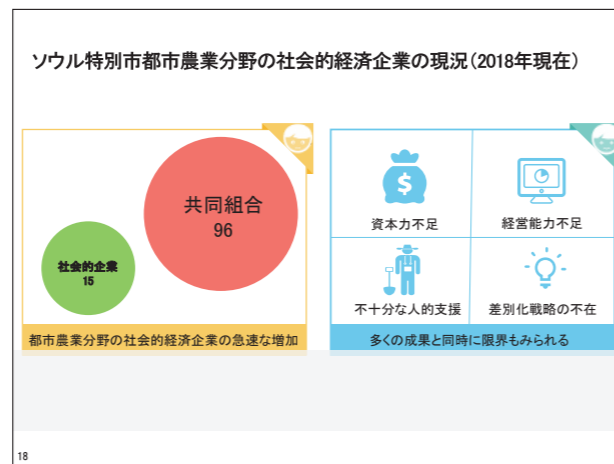
最近この江東区は、都市農業マスタープラン・中長期ビジョンを作成しました。中身は非常に複雑ですが、「誰もが幸せな、暮らしの中の都市農業」が大きなビジョンとして掲げられています。そして、都市農業の目指している価値としては「共に分かち合う江東」と「緑の健康な江東」の2つあります。様々な具体的事業もここに記されています。

都市農業公園	
<ul style="list-style-type: none"> 2013年5月、都市公園緑地法が改正され、テーマ公園として都市農業公園を新設できるようになり、公園内の農園造成が可能となった。 2016年現在、韓国の都市農業公園は7カ所、103,444㎡、参加者22,389人 	
<ul style="list-style-type: none"> ソウル特別市の事例 ヒャンリム都市農業体験院 <ul style="list-style-type: none"> 恩平区弘光洞 458-11 24,615㎡ 農園、水田、癒やし庭園、薬用植物園、堆肥場 仏巖山ハーブ公園農園 <ul style="list-style-type: none"> 産原区上深洞 95-336 1,100㎡ 公園内の遊休空間を活用した農園を造成 江東都市農業公園 <ul style="list-style-type: none"> 江東区通村洞565-1 12,000㎡ 観察農園、伝統農具展示館 冠岳都市農業公園 <ul style="list-style-type: none"> 三成洞(新林洞)山86-6 15,000㎡ 農園、子供の森、ハーブ園、多目的館 	

韓国では「都市農業公園」がブームとなっています。この公園はもしかしたら練馬をモデルにしたのかもしれません。たくさんの方が練馬を視察していますし、会議をするたびに「練馬」という言葉が出ます。ソウルのこの公園を見ますと、練馬と似ているとお感じになるかもしれません。



こちらの写真のような、都市農業公園があります。



続いて、社会的企業についてお話しします。雇用創出についてです。社会的企業は現在15社あり、共同組合は96あります。都市農業を専門としている企業がこれだけあるということです。どのようなビジネスを実施しているのかという点ですが、農園づくりや、堆肥づくり、都市農業の学校経営、また最近では養蜂やキノコづくりの企業も出てきました。こういった企業をまとめて社会的企業と呼んでいます。しかし、様々

な理由により経営が2〜3年もたない企業がある等の問題も抱えています。

都市農業公園の課題
<ul style="list-style-type: none"> 生活圏の公園緑地として都市農業活用スペースを造成 市民の生活圏内の遊休地や遊休建築物を活用し、共同体農園や屋内農園を造成し、生活圏の公園緑地の役割を果たす。 都市公園造成計画に都市農業を含める 市民参加型公園造成管理の優れた政策手段が公園内の農園造成 都市農業と都市公園政策を連携した多様な政策手段の活用 都市農業公園、食べ物の森、公園内農園のタイプ分類、ガイドライン作成 都市農業と都市公園の連携は転換期の都市農業政策の望ましい方向性 市民の健康増進をはじめとする都市農業の多面的価値を考慮しつつ量より質を重視する都市農業政策推進の方向性に合致する政策

結論として、今後どうすべきなのか、どうすれば良いのか、ということです。まず、都市農業の課題として、ソウルの都市農業公園というのは、全てソウルの外周部にあるため、都心にももっと公園を作らないといけないということです。つまり、身近な緑地スペースとして、都市農業を活用していきたいということです。

都市農業分野の社会的経済企業の課題
<ul style="list-style-type: none"> 都市農業は、教育、福祉、癒やし、生物多様性、環境、文化、芸術、共同体、社会的連帯など、様々な領域にわたる多面的価値を持つ。 都市農業分野において効果的に雇用を創出するためには、単純な雇用の提供という概念から脱し、多面的価値の領域と雇用が結びついた新たなビジネスモデルの開発が必要
<p>都市農業関連事業の方向性の多角化</p> <ul style="list-style-type: none"> ビジネスモデルとしての市民への農業教育、青少年の農業体験教育 都市農園のスペースにカフェ、飲食店、売店、工房、書店なども一緒に運営 都市農業の現場における案内ガイドスタッフ養成、農園観光プログラムの開発 政府が費用を支出する障害者ボランティアプログラムの開発(社会的農業と連携) ファーマーズマーケットと地域農産物を都市農園で結びつけ、ネットワークを形成

次に、都市農業の共同組合や社会的企業を作る必要があるという点も挙げられます。今はあまりにもシンプルのため、ビジネスや事業を多角化する必要があります。青少年の教育・体験、工房も複合的に経営するという点です。

韓国の転換期における都市農業の課題
<ul style="list-style-type: none"> 時代の転換 <ul style="list-style-type: none"> 気候変動危機の時代(気候変動と大気汚染の密接な関連性) 経済成長時代の終焉 社会的価値重視 都市農業の転換 <ul style="list-style-type: none"> 都市農業の成果評価と新たな方向性を模索するのに適切な時期 環境にやさしい都市農業を超え、再生的発展に貢献する都市農業へ 私的な活動を控え、都市農業の公共性を強調 量的成長から質的成長への転換 都市農業の価値に対する認識の転換: 都市農業と環境、健康、社会的農業

ソウルにおける都市農業は現在、転換期であるということです。2012年にソウル特別市は、当時の市長が「都市農業元年」を宣言しました。その時も雇用創出を強調しました。今、都市農業は趣味・余暇であるのと同時に、雇用創出のチャンスであると言われていています。20年後のソウルの生活の糧は公園であり、都市農業であると、市長は発言しています。金融も保険も、世界の経済はあまりにも不安定であり、農業こそがソウルの未来を担う主力産業になると主張しました。そのためそれ以降、ソウル特別市は農業に200億ウォン(約18億円)程の予算を投資しました。しかし、一般市民はあまり理解を示しておらず、認識が低い状態です。市議会議員もあまり認識していませんでしたので、孤独な闘いでした。しかし気候問題もありますし、経済成長も頭打ちの状態です。また、社会的価値を重視する時代になり、こういった転換期に差し掛かっている中、ここ7年間でソウルの都市農業を反省しようという動きがあります。ではどのように立て直すのか、という点については、現在ソウルは悩んでいます。

最後に、社会的農業・社会的企業が新たな争点となっています。社会的農業とは、今年に入って「社会的農業法」の法案が出ました。もともとの計画では、今年初めに制定されるはずでしたが、今でも国会に上程中です。都市農業を社会的農業にする、というのが最近の争点です。本日のテーマとも直結するかもしれません。ご清聴ありがとうございました。

分科会②

ジェームズ・クーンズ / トロント

NPO トロント・アーバングロワーズ コーディネーター

都市農業を通じた 地域コミュニティの構築

ジェームズ・クーンズ

練馬区 世界都市農業サミット

2019年 11月30日



トロント・アーバングロワーズ

私は、ジェームズ・クーンズと申します。トロントにおいて都市農業を推進している団体、トロント・アーバングロワーズのコーディネーターをしています。また、ライオン大学で都市農業と食料安全保障についての教鞭をとっています。

都市農業の多くの機能

社会的包摂
リーダーシップ醸成

技術の向上
環境サービス

持続可能な開発目標



都市農業は、トロントにおいて大きな重要な役割を果たしています。特に社会的なつながり、リーダーシップ能力の向上、環境にも役立っているということをお話ししたいと思います。よく皆さんの話に出てくる「SDGs (持続可能な開発目標)」にも都市農業は沿っているところがあります。

- ストップ・コミュニティ・フードセンター
- サン・ロマーノウェイ農園
- アクセス・アライアンス屋上農園



3つの事例研究を見ていきます。最初は、「ストップ・コミュニティ・フードセンター」、2つ目は「サン・ロマーノウェイ農園」、3つ目は「アクセス・アライアンス屋上農園」についてお話しします。

ストップ・コミュニティ・フードセンター

グローバルルーツ農園



ストップ・コミュニティ・フードセンターは、カナダの中で、最も古くからある食関連のNPOの1つです。近隣住民が参加する地域コミュニティのハブとしても機能しており、社会的なつながりや市民の参加を推進し、食料に関するスキルの構築を進めています。このようなことが事業の中核となっていますが、本日は他の事業についても話をしたいと思います。

まず、ストップ・グリーン・パーンのところにある多文化の農園、「グローバルルーツ農園」についてです。ここでは、文化的に重要な作物

を育て、共有することができます。農園にある建物は、商業ビルとして使われるはずでしたが、実際は多目的なハブとして転用されており、横にはストップ・コミュニティ・フードセンターの温室も設けられています。

ストップ・コミュニティ・フードセンター

グローバルルーツ農園



グローバルルーツ農園では、農地でお年寄りと14歳から17歳までの若い人たちが一緒に作業をします。どのように植物や食料を育てるかといったことを通して、お年寄りは若い人たちと一緒に活動し、収穫後は作物を一緒に料理して食べます。このようにしてコミュニティが構築され、友情も育まれていきます。カナダに移住してくる移民の人たちは、晩年大変孤独な場合もあります。お年寄りは、このような場が提供されることで社会に貢献し、若い人と交流する事もできるので、皆にとって非常に良い薬のように作用しています。

ストップ・コミュニティ・フードセンター

マシュキキイ；アキイン (地球の薬草園)



次は、カナダの先住民の人たちのための農園です。今カナダでは、過去に移住してきた白人の人たちと先住民との間で和解が起きています。この農園は「マシュキキイ；アキイン」という、シティーパークに位置する車輪型をした

薬草園です。先住民やホームレスの人にシェルターなどを提供している「ネイティブ・メンズ・レジデンス」というNPOが運営しています。この農園では、先住民の教えを用いて野菜・薬草を育てたり、健康な生活について学ぶことができます。これは大変必要とされている事業です。というのも、トロントに住んでいた5万人以上の先住民の人たちのうち3千人以上がホームレスになっており、多くの人が貧しい生活を強いられ、薬物乱用なども深刻な社会問題になっています。彼らにとっての神聖な薬草である杉、セージ、スイートグラス、タバコ等が栽培されています。この事業はSDGsに沿っており、飢餓を終わらせること、健康な生活を保障し福祉を促進すること、十分に安全な住宅を提供すること等が取り組まれています。



サン・ロマーノウェイ農園



こちらのサン・ロマーノウェイ農園は、タワー再生事業 (マンション地区に農園を増やす事業)の一部として作られ、トロント北西部のジェーン・アンド・フィンチ地区に位置しています。この辺りは失業率・犯罪率が非常に高く、貧困層も多い地域です。移民の人たちが最初に住宅を構えることが多い場所でもあります。

サン・ロマーノウェイ農園 事業目標

- フードセキュリティの向上
- 屋外スペースの緑化と持続可能な再活性化
- 地域コミュニティの一体性とプライドの強化
- 社会的企業、職業訓練、雇用の機会

このプロジェクトの事業目標がこちらに挙げられています。まず、フードセキュリティ（食料安全保障）を向上させること、屋外スペースの緑化と持続可能な再活性化を行っていくこと、地域コミュニティの結束とプライドを高めること、それから重要なことですが、社会的企業、職業訓練、雇用の機会を創出していくということです。これは、SDGsの11番の目標と関連し、持続可能な都市づくりをすることと、きちんとした住居を確保するということです。

サン・ロマーノウェイ農園



バルコニーで野菜を栽培する取組は2014年から始まり、すぐに大成功を収めた事業となりました。当初、1,300人位の人たちが地元で野菜や果物を育てたりして携わりました。このように地域において栄養を摂るということは大切なことであり、食料供給の不安定さは大きな問題です。糖尿病を患う人の割合が、過去最も高くなっているという問題もあります。この地域の他の問題としては、ひとり親の数が多く、全世帯の40%がそうであると言われています。また、白人と他人種の人たちの差が、大きくなっているということもあります。例えばフードセキュリティの割合では、白人と黒人では非常に大きな

差があるということが報告されています。

右の写真は、花粉媒介者が受粉するための農園で、生態系をもとに作られ、教育的な機能もあります。子どもたちが生物やガーデニング、環境について学ぶことができます。最後に、この美しい農園は、人々が外に出て自然を楽しもうと思えるような空間となっており、これは心身の健康にも良い影響をもたらします。特にSDGsの15番目の目標がこれに関連しており、2020年までに生態系と生物多様性の価値について、国と地域の計画に盛り込んでいくというものとなっています。



こちらは果樹園の写真です。訓練をしているところですが、このようなことが雇用に繋がったり、仕事の開拓や地域の都市農業に結びついたりしています。都市農業には、非常に明確で意外な役割があります。果樹の手入れに関する典型的なプログラムとしては、トロントがコミュニティ農園に隣接する果樹園で実施するものがあります。例えばバルコニー農園等もありますが、トロントでは都市農業に関わる仕事が創出され、多くの住民が地元で園芸に関する職を得ることができます。このように、都市農園は大きな便益をもたらしてくれています。そして、おそらく一番大切なことですが、地域コミュニティと地域経済に新たに入ってくる人たちのをうまく包摂していくということにも繋がっています。



アクセス・アライアンス 屋上農園

最後の例ですが、トロントの中東部にあるアクセス・アライアンス屋上農園です。コミュニティの健康センターであり、非常に多くの労働者階級と移住してきた人たちを受け入れています。このような層は地域の高層住宅に住んでいるため、食物を育てる土地の確保が大きな課題でした。屋上農園は彼らに重要な機会を与えて、単なる食料栽培以上の便益をもたらしています。

アクセス・アライアンス屋上農園



プログラムをいくつか見ていきたいと思います。農作業をしながら第二言語としての英語を教えるというプログラムがあります。英語を学び、実際に色々な活動を通して実践の中で練習することができます。この組織では他にも、バイオリーダー・アカデミーというリーダーシップ・プログラムがあり、若い人たちや青年に対して、有機農園や食料安全保障、環境について教えています。また、人前で話す技術やプレゼンをする訓練など、重要なスキルも実践のなかで身に付いてきます。いわば実際に働くための技術が身につけられるため、雇用にも繋がっています。

結論

都市農業は、単なる食料栽培ではない:

- 人々を、歓迎された気持ちにさせる
- 新しい技術を学ぶ
- 市民に力を与える
- 市内の緑化
- 次世代の農業者を育てる



結論としまして、私にとっての都市農業は、単に食料を栽培するという以上のもので。人々を地域コミュニティに包摂し、新しい技術を学ぶことができ、市民に力を与え、まちをより緑化することができます。そして、おそらく最も重要なことは、次の世代の農業者を育てることができるということです。以上です。ありがとうございました。

分科会②

パネルディスカッション

◆井原座長

それでは今からパネルディスカッションに入りたいと思います。各分科会メンバーからそれぞれ、海外参加者に対する質問を通して、考えなども聞いていきたいと思っています。

◆加藤氏

ジャカルタのガンヒジョウ（緑の路地）の取組に非常に興味を持ちました。というのは、練馬区の場合は、農業体験農園など近隣の方々との交流がありますが、少し離れたところの人たちとの交流はほぼ無いに等しい状況です。3つ質問があります。1つ目は、現在160か所のガンヒジョウがあるとのことですが、1か所あたり何名程度が参加していますか。2つ目は、参加者に苗や種が配布されるそうですが、水耕栽培だとそれ以外にも椰子殻の培地や設備に費用がかかるとは思いますが、それらにはどれくらい予算が出ていますか。3つ目は、講習会のようなものが定期的に行われていますか。

◆伊藤氏

私は「農の学校」の卒業生で、現在NPOを立ち上げようと考えています。その際にまずハードルとなるのが土地を確保することですが、一方、練馬区の生産緑地を貸借することが昨年から可能になり、チャンスの時期でもあります。円滑に土地の所有者と農業者をマッチングする必要があると思います。ロンドンにおいて、特にうまくいった取組など具体的な情報があれば教えていただけますか。

◆後藤氏

コーエンさんに対して質問です。今日の報告の中で3番目の項目として、農園がソーシャル・ジャスティス（社会的公正）を教育する場であるということをお話になりました。そのような観点は、日本の農園については今まで触れられてこなかった観点だったと感じ、非常に興味深く聞きました。2つお聞きしたいと思っています。1つ目は、農園がソーシャル・ジャスティスの教育の場であるとはどういうことを意味するの

かを教えてください。2つ目は、「フード・ジャスティス（食の公正）を知るアクティビティ」という項目もありましたが、フード・ジャスティスという言葉も日本ではまだ一般化していない言葉で、どのように理解するかということをお聞きしたいです。日本では一般的には、この言葉を所得・年齢・性別・住む場所などに関わらず、誰でもが必要とする質の良い食べものを十分に口にできることと理解されていると思います。これがフード・ジャスティスの中心的な内容だと思いますが、それだけなのかということ。フード・ジャスティスという言葉は、農産物を生産する人、流通に関わる人の労働や賃金のあり方も含めてもっと広い概念として考えられているようにも思いますがどうでしょうか。消費者と生産者のつながりにも関係する問題なので、併せてお聞きしたいと思っています。

◆栗秋氏

ソウルは大都市で世界一の人口密度であるということをつい最近知り驚きましたが、それなら農地面積は少ないことも理解できます。どの国を見ても都市農地の確保には大変な努力がされていますが、行政が主体として公有地で都市農業を始めるということは練馬と違います。土地の確保において、イさんのお話の中で、公共機関の優先購買制度を利用することを提案されている項目がありました。質問ですが、公共機関優先購買制度と都市農地の確保はどのように繋がるのかということをご説明いただきたいと思っています。また、分譲農園というものがあり毎年分譲するという話でした。日本人の感覚だと分譲＝売り払う、ということですが、賃借ではなく売ることの確認させていただきたいと思っています。

◆安藤氏

クーンズさんに質問ですが、今日のスライドの最初のページは社会的包摂という話で始まりましたが、日本だとこの言葉は、障害者福祉や高齢者福祉、社会的に不利な立場にある人たちの参加を促すといった文脈で使われる言葉

です。社会的包摂が都市農業と結びつくというところが、私たちにとっては非常に新しい、新鮮な感覚を持つところです。スライドを見ると、色々な移民の人たちが参加しているということがよくわかりましたし、先住民の話もされていました。あとは、労働者、貧困層など、様々な人たちの参加を促すという観点が色濃く感じられました。私の質問の1つ目は、なぜ都市農業にとって、社会的包摂が重要なのかということです。2つ目は、都市農業はこの社会包摂という課題の解決に一体何ができるのかということです。トロントの実態に即したお話をしていただけたらと思います。

◆井原座長

ありがとうございました。それぞれ、今あった質問に対して回答をお願いいたします。

◆メイディアンティ氏

ありがとうございます。加藤さんの質問にお答えします。ジャカルタでも東京都と同じように、近隣地域でコミュニケーションがあまり取れていないという問題がありました。しかしガンヒジョウを始めて、近所で一緒に同じ野菜を栽培したりすることによって、交流が盛んになってきています。自分たちの地域でガンヒジョウの実施を決める際には、住民たちで意見交換をします。隣組のメンバーで話し合ってからコミュニティで決定したら、隣組の委員長がリーダーを選定します。そうすると、そのコミュニティではガンヒジョウのプログラムを実施するという約束ができたということになります。ジャカルタ州政府の役割は先ほど申し上げたように、住民に苗や種子を無償で提供すること、技術や栽培方法を指導することで、水耕栽培技術も教えています。例えば玉ねぎはどのように栽培するかといったことから、ポリ袋で栽培する方法なども教えています。ガンヒジョウでは、果物などの栽培もおこなわれています。1つの施工技術を用いると約100mの長さの畑ができます。栽培を始めて2年間くらいは、行政職員が毎週そのガンヒジョウに出向いて指導するなどバックアップを行います。隣近所でこのようなことを行うことによって、人々が栽培に興味を持つようになります。

ガンヒジョウが何か所くらいあって、どれくらいの人々が栽培を行っているかということですが、2016年に150か所から始めて段階的に増や

しています。ジャカルタは、南ジャカルタ、北ジャカルタ、西ジャカルタ、東ジャカルタ、スリブ諸島など6つの地域に分けることができますが、1地域あたり20か所位のガンヒジョウがあります。先程申し上げたように、2016年には150か所、2017年には77か所となっていますが、これは増加している数なので、今年も各地域25～30か所増えると想定すると、全体で150か所増加するという計算になります。

◆加藤氏

ガンヒジョウは100m位の長さがあるということですが、1か所でどれくらいの人々が参加されていますか。

◆メイディアンティ氏

ガンヒジョウ1か所あたり、行政のコーディネーター1人と、参加メンバーが最低5～10人、最高25人となります。つまり、ガンヒジョウ1か所あたり平均15人程度で、1地域平均20か所あるので、合計人数は、15人×実施箇所数で計算できます。

◆ウィリアムズ氏

土地の確保、アクセスに関するご質問ですが、新しくNPOを設立されるということで大変ワクワクしますね。がんばってください。これまでの成功事例と課題について、つまり、マッチングにおけるこれまでの経験を共有したいと思います。土地の確保に関してうまくいったことは、先ほどお話ししたように、基本的には公有地を探してきて確保するというのが最も簡単なアクセス方法です。公園の中の空間や、建設中の住宅の周りがある土地を見つけます。特に高層ビルの場合は、近くに乱立させると日当たりが確保できないという事情があるため、大抵、ビルの周りには、空地があります。そういった場所は特段目的がないので、草がボーボーに生えていることも多く、私たちはグリーンコンクリートと呼んでいます。このような土地は使いやすいと思います。また、地元の評議会や病院は、私たちの取組を通した狙いに関して非常に共感が得やすかったため、話がしやすいという経験があります。

私有地に関しては少し状況が違います。イギリスでは土地の税金がないため、私有地の保有者は何もしないで土地を保有しておいて将来的にそこに建物を建てて収益を得たりします。こ

のようなことに対して、土地に対する税金を導入しようとする運動を行っている人たちもいて、議論を呼んでいます。農業人口が減少していく中、海外から多くの食料を輸入し、フード・セキュリティが確保されていない中、現状を変えなければいけないと思っています。一方で、私有地の確保という意味では成功しているというところもあります。将来的に開発が行われそうな土地、お金を払って管理されているような土地をターゲットにして、一時的に農園を作るということを行っています。新しく住宅開発が行われる場所でも成功していて、新築住宅の計画の中に最初から緑地や農地を設けたりしています。また、コミュニティーセンターや幼稚園、高齢者向け施設なども、土地を共有するという考えに対して前向きで、本人たちは農業を行わなくても他の団体に土地を貸すということを行っています。ショッピングセンターでも、食料栽培を行っていて、盛り土をしたところで木やハーブを植えたりしています。また、イギリスでは教会が多く土地を所有しているので、話をして教会の土地で栽培したりもしています。他には、水道局などの敷地ですが、民間事業が入っているところもあり、そこと交渉して土地を活用するということが比較的うまくいっています。

そういったわけで、やはり違う考え方や、クリエイティブに考えるということが重要だと思います。どのような場所に可能性があるのか悩みながら、普通だと、食料を育てるような場所と思わないようなところでも、目を向けてみるということが重要だと思います。最初にこの事業を始めた時、土地の所有者や住宅機関の人たちに、食べ物を育てたいと話したところ、「なんですって?」と聞き返されました。最初は、おかしいのではないかとといった反応でしたが、最終的にはそう言っていた住宅機関の人たちの方から、コミュニティーの人たちへ「ここで食料を育てたらどうか」と言ってくれたのです。時間をかけてそれが当たり前になってきたということです。人々の意識を変えることもできたのだと思っています。

そして課題についてですが、市の周辺にある大きな土地の所有者との交渉は難しかったです。都市の周辺にグリーンベルトと呼ばれる保護された土地があるのですが、馬のための牧草地として保護されていました。今は馬がいないので農地にしたらどうか考えたのですが、私たちの土地ではなかったのが難しかったです。また、土地の所

有者がわからないという問題もありました。成功例が多いのは公有地です。以前は、種苗場として使われていて現在は使われておらず土地が残っているという場所も沢山あり、農地に転換した例も5つ、6つあります。今後は、都市の周りにある現在使われていない大きな土地の確保に関しては改善する必要があると思います。

そして最後の要素ですが、マッチングサービスについてです。色々な人が様々なマッチングを試みてきました。土地を探している人と土地を持っている人のマッチングなどです。特に「ランドシェア」サービスが人気で、有名人シェフがテレビで宣伝したりしています。最初はうまくいっていたのですが、最終的には広げすぎたのかなという印象です。例えば、「土地があるので、ここで農業をやりたい人を知りませんか」と電話がかかってきて、実際に農業を行いたい人は、ロンドンから2〜3時間離れたところに住んでいて現実的ではないということもありました。私も色々な人に電話をかけて興味がある人を探したりします。上手くいく時もありますが、かなり複雑なプロセスですので、私も常にこの部分をどう上手くできるのか考えていますが、あまりいい方法が見付かっていません。「596エーカー」というプロジェクトがあるのですが、使える土地を見つけたときにその土地に個性的な看板を立てるといったものです。コンピューターを通してやるのではなく、地元の人たちと話をしたり、情報を仕入れたりして、このような地道な現場の作業というのが有効なように思います。土地利用に関しては自らの目で見て確認するということが必要になりますので、必ずしもITが解決策になるとは思いません。

◆コーエン氏

フード・ジャスティスというのが重要な問題です。人にとって色々な意味を持っています。これには、公正な食料システムを作るということ、世代間の公平化ということもあります。したがって、次世代に持続可能な形で食料を作っていくことも重要でしょう。実際に、都市農業がどう貢献するかいくつか例を挙げてみようと思います。

まず、農業者の人数は把握していますが、それ以外にも沢山の方々が都市で農業活動を行っているわけですからそれも数量化することも重要だと思います。そして、現在の政策と戦うということも重要です。トランプ政権では、政府

が移民に対してグリーンカード（アメリカ永住権）を拒否するといったこともあります。例えばフードスタンプ（低所得者向けに行われる食料費補助）を申請すると、永住権を認めないということもあります。都市農業は、新鮮な野菜を自分たちのコミュニティのために作っていくという必要性がありますが、国の政策が変わらなければ、移民が属するコミュニティの人たちが同じような便益を享受することはできませんし、食料を買うことができないわけです。これはまさに土地利用に関する問題です。練馬においても商業用地と宅地用地の開発における競争があると思いますが、誰が決めるかということです。コミュニティの人たちが決めるということが重要です。国のレベルになってくると、決定するのはフード・ジャスティスの問題もありますし、都市農業に関与する人たちにも聞かなければなりません。公有地も、公園や駐車場その他の利用のためにあてがうわけです。都市農業に関するそのような土地の分割は、最終的には選択をしていかなければならない政治的な意思決定でもあります。多くの都市ではこの問題は複雑で、食料の安全の問題もある一方、食料の主権という問題もあります。食料栽培もそうですし、資金調達のために食料に付加価値をつけていくこともあり得るでしょう。政治的な意思決定や規制を通じて、食料を売っていくということが、フード・ジャスティスの問題だと思います。

プレデタリー・マーケティングというものがありますが、いわゆるジャンクフードの問題です。多くの国ではファーストフードの会社が、意図的にマイノリティーのコミュニティに販売を促進しているということがあります。例えばアメリカのマクドナルドでは、黒人文化がかっこいいという雰囲気や、ビックマックを黒人やラテン系の子どもたちに促進するといった具合です。彼らにマクドナルドの良い消費者になってもらうのです。例えばサブウェイにおいても同じようなことを行っています。これはまさにフード・ジャスティスの問題です。

フード・ジャスティスの問題でも上流と下流があり、農業者の権利の問題もあります。さらに、ニューヨークでは現在、より良い食料を買う権利の問題ということがあります。例えば、どの程度食料にお金を使えるかということですが、学校の昼食やイベント時に一定の価値を生むかどうか、それが重要になってきています。公平

さ、動物の倫理的な扱い、生態学的な価値などが商品や物流にあるかどうかということが問題になっています。

都市農業プロジェクトにおいてはスライド等でも見てきましたけれども、誰もが都市の中で十分な食料を得て、健康な食料を提供することができるということがわかっています。そういった意味で構造を変えていく必要があります。そして食料生産に関与していくなかで、多くの考え方が生まれてきます。なぜこのように食料システムがなっているのかということから、色々変えていく必要があることが見えてきます。

◆イ氏

私は2つ質問をいただきましたが、初めが、公共機関の優先購買制度と農地の確保についてどういう関係があるのかという質問でした。大きな関係はないと思います。まず公共機関の優先購買制度というのは、韓国において非常に広い範囲で使われています。例えば、障害者が生産した製品は優先的に買うとか女性団体が作った製品は優先的に購買するといった形で非常に広い範囲になっています。また、韓国で数年前に策定された「ローカルフード活性化法」という法律がありますが、地元産食料を活性化するためには公共機関で地元の食料を優先的に買うべきだという提案もあります。まだ今のところは、そういった観点からの公共機関の優先購買制度であり、農地の確保とのつながりはまだできていないようです。

しかし、発表で申し上げたように、ソウルには都市の周りにあるグリーンベルトの中に、1,100haほど農地があります。練馬と違うところはソウルのグリーンベルトにはほとんど住宅はありません。都市農業のための農地確保は重要ですが、日本で言う都市農業の概念は韓国とは異なっていて、韓国の法律では、そういった農地は都市農業と呼ばれないのです。韓国の「都市農業育成法」では、趣味と余暇活用のためのものというように定義されていますので、専門的に農業をする農業者が所有する農地は、対象外となってしまいます。

現在私は、ソウルの都市農業委員長もやっていますが、その委員会の会議のたびに、このままではソウルの都市農業が発展しないと主張しています。日本のようなやり方にすべきだと毎回会議のたびに言っていますが、なかなか現実には難しい課題もあります。私は韓国の「都市農

業育成法」というのがむしろ都市農業の発展を妨害しているのではないかと考えていて、日本の事例から多くを学ぶべきだと思います。

2つ目の質問は分譲農園に関するものでした。分譲と言う単語によって誤解が生まれたかもしれません。分譲農園は売却ではなくて、日本の区民農園に似ていると思います。つまり、空いている公有地や私有地を自治体が借りて市民に貸すと言う形です。年間の使用料を払う形で、公共機関が貸し出しているものは安価です。1坪あたり10,000～20,000ウォン(約1000円～2000円)で、高くても1坪あたり2,000円位です。そして1区画あたり4～5坪位が基準になっていますが、価格はその自治体の区ごとに違い、その区の委員会が毎年、年度初めに決定しています。

一方で、地主がいる分譲農園の場合には、賃貸料は比較的高めです。ソウルには60か所ありますが週末農園と呼ばれているものです。1坪あたり30,000ウォン～40,000ウォン(約3000円～4000円)程度です。

◆クーンズ氏

社会的包摂というのは非常に難しい概念です。まず、私たちがどのような都市農業を行っているかということから話したいと思います。例えば(企業が行うような)垂直農業は、社会包摂には関係なく、利益の最大化が目的となります。何か社会的なことを目標としているものには、価格もプレミアムということで上乘せられます。

トロントの人口の約50%は海外で生まれた人たちで、この数字は移民が進むにつれて高まっています。これによって課題も生まれますが、トロントにとっては大きな機会をもたらされています。都市農業は、まさにその答えとなり得るものです。いかにしてトロントを、より社会的包摂性の高い都市にできるのかということに役立ちます。トロントでは、新しく外部から入ってくる人々を尊重します。彼らの文化や食文化を尊重し、彼らから学び、様々な国籍の人たちが一緒になって友好的な社会を作りたいと考えています。理想であり実現するのは難しいかもしれませんが、これはやらなければならないことだと多くの人が実感しています。

「食料」をフェスティバルなどのイベントを通して共有することを行っています。自分自身の文化に誇りを持ち、また文化に関してこれまでの経緯を他者と共有する機会でもあります。これによってトロントがより豊かな都市に、理解

の深い都市になると私たちは考えています。社会的包摂と言うのは、フード・ジャスティス、ソーシャル・ジャスティスという視点からも見るべきだと思います。農業のプロジェクトが、もう少し人種的に偏った地域で行われたとしたら、果たしてうまくいくのだろうか考えなければなりません。こういったことから、誰がそのプロジェクトを主催するのか、立ち上げるのかも重要です。今私たちは、人種的に偏った人々をプロジェクトに招くと言う段階は過ぎ、実際に民族的にも多様な人々に主導してもらい、方向性を決めてもらう段階にあります。こういった活動を推進しているNPOでは多くの場合、白人主導なので、そうではない方向に進んでいることも多くあります。

説明の中でも触れましたが、高齢者と若者が一緒になってやっていくというのも社会的包摂の1つですし、また非行少年や法律を犯した問題があるような人々も含めていくということも社会的包摂です。社会的企業ということで、今後の人生で役に立つスキルなどを身に付けながら同時に社会に貢献するということを目指しています。

◆井原座長

ありがとうございました。海外参加者の皆さんからもご意見をお聞きしたいと思いますが、皆さんの手元に全体討議の課題という資料があると思います。ここでは、4つの課題を挙げてみました。

1つ目は、小規模で分散型の都市農地をどう考えるかということです。かつて日本は大規模農業が評価される時代でしたが、今は小規模分散型という形で行われています。特に都市の場合は地価が高いことからどうしても小規模分散型になりますが、これを今後どのように考えていくのか。

2つ目は、農地にアクセスする条件が良くない中で、都市農業に関わる人々をどうやって増やしていくのかということです。そこに参加した人がどのように変わっていくのか、成長していくのかということも重要な視点かもしれません。

3つ目は、都市農業を支えていく仕組みについてです。誰がどのような組織を作ればうまくいくのか、NPOの役割やパートナーシップについてどのように考えていったらいいのかということです。

4つ目は、都市農業といっても、コミュニティ

農園から練馬のような農業者が行う農業まで、本当に様々な都市農業の形態があります。言い換えれば、多様性があり、色々な面で評価できます。これら多様性を持つ都市農業が今後どのような方向へ進んでいくのでしょうか。先ほどからいろんな意見が出ていますが、コミュニティを育てる、どう結びついて、展開していくのかということもありました。そのことが将来像として住民の生活や暮らしにどう役立っていくのか、そういった都市農業の将来像を考えてみたいと思います。

◆ウィリアムズ氏

私は練馬で目にしたものと、私が過去10年間ロンドンで取り組んできたことを比較して考えていました。お互い学べるのがたくさんあると思います。文化や伝統の質問についてもここに関わってくると思います。

まず、発表の中でも話しましたが、人々が参加する動機は何であるのか、様々な動機があるということに触れました。それは、おそらく練馬でも同じではないでしょうか。それぞれ様々な理由で、皆さんは都市農業に参加されているのだと思います。どのように考えを売り込むかという人も人が考えるきっかけになると思います。ここ2日間で見ただけで、より多くの参加者を募るためにクリエイティブな方法がとられていると思います。農業体験農園もその1つですし、非常にクリエイティブな方法で人々の関心を集めていると思います。多様性を考えても、練馬ではかなり焦点を絞ったやり方が見られます。

一方、ロンドンでは、より自由度が高いというか、よりカオス(混沌)で、様々な空間に農業が入り込んでいるという状況です。したがって、どこまで都市農業をやっているのか、やっていないのかがはっきりしません。しかし、練馬ではそれが明確です。バスで視察しているときに思ったのですが、きちんと区画があって、どこから入ってどこから出るという境界が明確でした。ロンドンでは、公園の中で食用植物を育てていたり、ハーブを育てていたりといったことを目にします。市民農園に行くと、花も野菜も育てる場所が一緒になっています。多様な人々に関わっていることを考えると、育て方や農園のアプローチにも多様性を持たせるべきではないかと思っています。

◆コーエン氏

私もウィリアムズさんと同感です。どのようにして都市農業を拡大させるかという計画を考えるのではなく、どのようにして都市農業が、都市が抱えている問題に活用できるのかということに見方を変えるというのが重要だと思います。都市農業は、例えば都市が抱えている気候変動に対する回復力を高めることができるのかといったことや、様々な問題に都市農業がどう有用なのか考える必要があると思います。今回、様々な形で展開されている都市農業を見ることができました。また、地方自治体を参画させて都市農業を支援してもらうことの重要性にも触れられたかと思っています。

◆イ氏

私は3つ目の課題について意見を申し上げたいと思います。行政主導の都市農業、あるいは市民主導の都市農業、どちらなのかということです。ソウルで最大の争点となっているのがまさにこれです。ソウルは2012年に「都市農業元年」を宣言して、今年で7年目になります。あまりにも行政主導で量を重視していたと言われていました。急激に拡大しましたが様々な問題を抱えています。そこで最近では、市民主導である必要があり、初めて公共性や創意工夫も確保されるという指摘が出ています。特にソウルだけでなく韓国全体を見てもそうです、あまりにも行政主導ではないかと私は懸念しています。例をあげると、昨年、韓国では新しい都市農業制度が1つ導入されました。練馬区の農サポーターと非常に似ているかもしれませんが、韓国で新しく法改正をして、都市農業管理士というものを作りました。専門性のある人が、一定の都市農業分野の教育を受け、政府が資格を与えるという制度で、立ち上げられて1年で3,000人の管理士が生まれました。今年では4,000人を超えるだろうと言われており、管理士が爆発的に増えています。行政は市場規模を考えずに資格を乱発してしまい、現在、管理士の人たちはやることのない状況です。農サポーターも同じようなものだと思いますので、このようなサポーターが多いというのも、もしかしたら望ましくないかもしれません。地道に進めることこそが、長期的な発展のためにはプラスなのではないかと思いました。

◆クーンズ氏

どうやって都市農業を支えるかということですが、行政はそんなに信頼できないところもあると思います。多くの人たちが資金を求めている中で、予算の削減もありますので、そういった支援だけに市民が頼るわけにはいきません。NPOは非常に建設的な役割を担うことができますが、資源が常に問題となります。助成金を得られれば良いですが、得られなければ大変です。したがって、都市農業を支える大きな役割が市民にあると思います。特に計画を進めるための主導者になるということです。非常に強い利害グループもあれば政治家もいますが、彼らを1つにまとめるということができていません。もしそれができれば、市民と一緒に話をまとめて1つの声として進めていくことができます。ただ、まだこれはできていないので、そういったところを今後もっとサポートしていければと思っています。

◆井原座長

ありがとうございます。これからは住民参加、住民主導ということが必要です。住民主導を進める上で、それをサポートするNPOの役割は具体的にどんなことがあるかということをお話していただければと思います。

◆クーンズ氏

NPOは都市農業に関して、色々なことをやっていると思いますが、やはりどの程度資源があるかということが関わってきます。お金がなければ人々の労働に対するお金を払うことができませんし、NPOの取組を宣伝することも資金によっては十分にできなくなる可能性もあります。NPOがやること自体は必要ですが、それだけでは充分ではありません。やはり市民の活動家も必要で、彼らが明確に政治家に声を届けるといったことも重要だと思います。何度もこれまでもやってきましたが、農業コミュニティには、そのような強い主導者が必要です。一晩でできるわけではありませんが、始めていかなければいけません。

◆ウィリアムズ氏

私の経験からお話すると、NPO、ボランティアや市民は、都市農業における基本的な部分です。私たちが調査をしても、人々は、いろんな形で場所を移りますので、生産者に質問する

のが難しいところもあります。ボランティアだと思っている人もいれば、単に食物の生産をしているだけだと思っている人もいますが、ボランティアの人たちは非常に重要です。植物の手入れをする参加者は、便益を享受する者でもあります。市民として声を届けていくことも重要になります。

ボランティアとして活動すると、いろんな活動があり、生活が忙しくなります。ボランティアをやめたり、また始めたりということもあるでしょう。ボランティアの人たちは時間が沢山あるだろうと考える人もいますが必ずしもそうではありません。高齢者の人たちにも、いろいろな約束や予定があります。孫の面倒を見なければいけない、また自身の年老いた親の面倒を見なければならぬといったこともあります。そうなると、色々な形でのサポートが必要になるので、そういった意味ではNPO組織が重要になってきます。

また、従事者の声をまとめていくということも重要です。例えば農園を営んでいる人たちが、様々な開発等の脅威にさらされ、質問を受けてどう答えていいかわからないというようなこともあります。そういった時に、他のグループの人たちと話を共有するといったことが大切でしょう。このような、グループとして繋げていく、点を繋げていくということが重要だと思います。これは私たちの世界にとって、必須だと思っています。影響をどう測定するかは難しく、そのような作業に関してお金を支援することなども難しいわけですが、先ほどお話をしましたが、社会的企業というものもあります。これは実現可能なのか、そういった組織が十分資金を確保できるのかなど、検討していくことも重要です。

◆コーエン氏

もう1つ申し上げますと、多くの異なったNPOがあります。1つ重要な点として、直接都市農業に関わっていない所でも、食料システムに関わっているところにおいてはNPOがサポートできるのではないかと思います。例えば、公共住宅、非営利の病院などです。そして農業の部分でも、農産物を通じて心血管病を回避していくといったところで役立つのではないかと思います。都市農業を通じて食料が大いに役立っているといった側面に着目すべきだと思います。

◆井原座長

ありがとうございます。会場の方からどうぞ。

◆質問者

ソウルの事例発表のなかで、学校農園が1,000校にあると聞き、とても多いように思いました。こちらについて詳しくご説明いただきたいと思っています。

次に、現在温暖化は大きな問題であり、都市農業はCO₂削減に有効であると思いますが、今回の発表の中では出てきていないようです。こちらについて伺いたいと思います。

◆イ氏

ソウルには小学校・中学校・高校合わせて約1,400校ある中の1,000校、小学校と中学校の殆どに学校農園があります。農園といってもとても小さく、花壇の1部を使って野菜を栽培するという活動です。これには2つの形があります。1つは市の教育委員会が行うものです。学校農園に関心の薄い教育委員長になると、活動も減少してしまいます。もう1つは、市が学校支援という形態で行う学校農園があります。長期的な側面から都市農業を発展させるためには子どもが重要であるという意識で行われています。都市農業を維持する取組で、先ほど触れた都市農業管理士という資格を持つ人々を学校農園に活用しようという議論も起きています。そうすれば彼らも職を得ることにもなります。

また、屋上農園というものも重視しています。というのも、ソウルには建物が密集して空き地がほとんどないからです。2年程前に公共住宅の屋上全数調査を行い、1,100か所ほどの屋上の空き状況を調査しました。次の段階としては、屋上農園をどんどん作っていかうと行政は考えています。

CO₂削減という話が出ましたがとても重要だと思います。現在、屋上に農園を作ることと太陽光発電パネルを作ることの間で利害が衝突しており、お互いどちらを採用するのが難しい課題となっています。

◆加藤氏

CO₂の問題は我々農業者も一般市民の方も理解していない部分が多いと思います。私の農園では、野菜がする光合成は、作物がCO₂を吸収して育っていくということ、果樹などにおいて

CO₂をため込んだ葉や枝を堆肥化して畑に戻していくことによってCO₂の排出を抑えているということも講習会の中でやっています。この講習会をしたときに今ひとつピンとこないのは、この問題が普段あまり目に入ってこないということもあると思います。我々農業者が、そういう問題を考えながら、野菜作りを通して少しずつCO₂の問題も教えていくことが分かりやすいのかなと考えています。

◆質問者

海外の皆さんからのお話を聞いていると、都市農業と言っても家庭菜園の延長でありボランティアでやっているようですが、どのようにお金を払って土地を借り、ボランティアに手伝ってもらっているのでしょうか。作った野菜の扱いはどのようにしているのでしょうか。

◆ウィリアムズ氏

様々な形でコミュニティの中で育てています。必ずしも画一的なやり方ではないですが、ほとんどのコミュニティ農園の利用は通常無料で提供されています。中には完全にボランティアが運営しているところもあり、栽培の専門家というわけでもないので、自分でやりながら学んでいきます。見た目が悪くてもいいからとにかく栽培をやってみようという人もいます。農園の中には、きちんとお給料をもらっているリーダーがいるところもあり、その人が栽培を指導しています。また、1区画与えられてその区画内で栽培をするという農園もあります。例えばバングラーディッシュ人のコミュニティであれば、自分たちの区画では何か自分たちの伝統的な作物を育てたいという希望が強いようです。

先ほど紹介しましたが、様々な形で栽培が行われています。生産者であれば、土地を持っているので、そこで栽培をした野菜の所有は自分になるわけです。コミュニティ農園であれば、余った分に関してはおすそ分けという形で分けることもしています。家庭菜園の延長というのは、ある意味正しいと思いますが、それで問題ないと私たちは考えています。それこそが農業の定義ではないかとも思います。

練馬区においては保護された農地があり、経験やスキルが豊富な農業者がいらっしやるのは幸いなことだと思います。そういった農業者から教えを受けることで若い人たちが農業に興味を持つというのは、まさにロンドンでも同じで

す。若く農業に興味がなかった人たちがコミュニティ農園を通して興味を持ち、いずれ農業者になるということもあります。日本でも農業者の高齢化という問題もあると思いますので、より若い人たちにより多く参入してもらおうということが大切ではないかと思えます。

◆井原座長

そこで採れた農産物はその人の所有になるわけですか。

◆ウィリアムズ氏

所有については具体的に誰も考えておらず、一般的にシェアしていると思います。もちろん自分で区画を与えられてその中で栽培しているのであれば自分のものになりますが、基本的にみんなシェアしているように思います。野菜が誰のものかで喧嘩になることはありません。

◆メイディアンティ氏

ガンヒジョウについては、生産物は基本的に所有者のものになります。余っているものは、近くのレストランなどに販売することもあれば、市場に持っていく人もいます。そういった販売のプロセスも既に決められています。政府が行うのはその支援だけで、管理に関してはその所有者つまりコミュニティが行うということになります。

◆井原座長

先ほどの質問の中で、海外の都市の都市農業は家庭菜園であって農業ではないのではないかという意見もあったと思います。ジェームズさんから、生産だけでなく多様な役割を持っているのが都市農業の特徴だとお話いただきました。少しその点についてお話しただけならと思います。

◆クーンズ氏

類似した部分もあると思うのですが、ただ、動機が何であるのかなぜ栽培しようと思うのかというところがポイントだと思います。カナダの状況を見るとアメリカもそうだと思いますが、動機としては色々なことがあります。重複しているところもあり、なぜ一定のプロジェクトが行われているかを説明するのが難しいところもあります。都市農業と言うのは非常に多様な取組です。非常に多くの道筋、方向性、やり方がありますし進化し続けています。

◆コーエン氏

私のスライドでもお見せしましたが、規模の観点で言えばNYCHA農園は5～6エーカー(約2～2.5ha)程度です。そしてボランティアではなく、農業者も支払いを受けますので、世界的にも1つのモデルになるものだと思います。あと非常に大きな3つの屋上農園についても説明しましたが、練馬の農業者より大きいところもあったりします。世界を見ていけば、小規模なものから大きなものまで様々な都市農業があります。

◆イ氏

ソウルの場合、自分の農園で作った農産物は自分の所有になりますが、販売することはできません。食品の安全性が確保されていない、つまり検査されてないので販売ができません。販売が可能なのは、区において何らかのイベントがあった時で、博覧会やフェスティバルの際には、イベントという形で非常に安く畑で生産された野菜などが出品されます。

◆質問者

練馬区に住んでいます。海外からいらした方たちの話を伺っていると、都市農業の可能性というのがものすごくあることが分かりました。イさんが都市農業の効果として、教育と雇用と共同体とおっしゃっていたと思います。これは、今後私たちが練馬で暮らしていく上で非常に大切なことで将来性を感じました。私は野菜作りをやっていますが、練馬で農地を借りることができなくて別の場所で借りています。先ほど賃貸で農地を借りることができるという話を伺いましたが、加藤さんや練馬の農業者の皆さんは、今後どのようなことをされるのでしょうか。例えばNPOに土地を貸して教育に使うとか、雇用のために使う、そういうことを考えていらっしゃるのでしょうか。

◆加藤氏

日本の法律では、今までは自作農と言って自ら耕作するという一文があるため、人に土地を貸すことができませんでした。これは、一説には農業者が第一資本である農地を取られないようにという思いもあったと聞いていますが、新しい都市農業振興基本法ができて貸借が可能になりました。JAや練馬区も農業者に対してアンケートをとっていますが、中には一定割合の農地を貸したい、貸さなければ維持ができないという高齢の方々もいらっしゃいます。そういう

農地に対しての今後の都市農業が抱えるひとつの問題ですが、長い間農業者がここまで守ってきましたが、これからは農地を残すために市民の皆さんに入ってもらうとか、行政やNPOがどう絡んでいって新しい仕組みづくりをするということが必要だと思います。ですから、農地を借りて、例えば練馬区内で野菜を作りたいということも非常に可能性があると思います。私どもの農業体験農園でずいぶん前に調査をしましたが、利用者75%が野菜作りを学ぶために来ています。25%の方はそれぞれの目的を持ってきていて、約6%が農業者になりたいということでした。まだその時は農地を貸せる貸借の法律がなかったので、地方に行って農業をやりたいという人たちもいました。それから農業ボランティアをしたいとか、日本の野菜作りを覚えて海外で貢献したいなど、非常に高い目的を持った方が25%いらっしゃいました。潜在的にいる人たちの生かせるような仕組みづくりということで、参加都市の方々の意見を聞いて、私には非常に参考になりました。少し未来が開けたかなとそんな気がしました。

◆井原座長

ありがとうございました。海外からお越しの皆さんと分科会の方から、感想と多様性を持つ都市農業の将来像をどう考えていけば良いのかということを示唆していただければうれしいです。

◆クーンズ氏

おそらく、私たちが立ち返らなければいけないのは、農地をいかに維持していくべきかという点です。都市農業というのは、やはり社会にとって必要なサービスであると思われることが重要です。1つはその多様性という点で貢献できると思います。また都市農業の運動は自立できるものでなければなりませんし、気候変動への対策や私たちの都市であれば貧困対策、そういったものと結びつけて考えていく必要があると思います。そして都市計画で影響を受けるようなもの全てと連携をして、都市農業自体が幅広いものになっていかなければならないと思います。社会にとって価値のあるものとして存在を示していく必要があると思います。

◆イ氏

練馬区の都市農業の現場を訪れソウルの都市農業と大きく違うということを感じました。しかしソウルの都市農業は練馬から沢山のことを学ばなくてはならないと思っています。まず1つ目に農業者が行う農業もすべて都市農業として捉える必要があると思います。全部を都市農業と捉えて初めて発展可能だと思います。もう1つは、私も都市農業運動の展開をしていて今は苦しいですが、農業は将来の成長産業だと思いますし、信念を持って歩むべきだと思います。都市農業が活性化すれば農業が発展して農業者が潤い、結果として持続可能な発展、開発に繋がっていきます。このような確たる信念を持つ必要があります、そういう信念を共有したときに、より良い将来が作り出せるのではないかと思います。練馬区を見ながら本当に多くのことを考えることができました。大変素晴らしい機会を与えていただきましてありがとうございました。

◆コーエン氏

私は研究者なのでデータについて考えますが、それぞれの都市農業について、類似点がかかなり多いと思います。都市そして国としては大きな違いがあるにも関わらず、都市農業のその現状というのは多くの類似点があると思いますので、今後もデータを収集して社会的にどういった便益があるかを証明できるようにしていきたいと考えています。それぞれの地方自治体で管轄されていますが、そういった情報データを世界的に共有できたとしたら、都市農業の推進において、大きく前進できるのではないかと考えています。

◆ウィリアムズ氏

これまでロンドンでは、農業と言う言葉を長らく使っていませんでしたし、むしろ使うことを避けていました。というのも学者が使いたがる言葉ですし、必ずしも人々の見方や食料栽培と結びついていなかったの、使っていませんでした。私たちのやっている事とは違うということも避けていましたし、都市の中に住んでいる住民にとっては農業というのは人気のある職業ではなかったということもありました。しかし見方が変わってきています。都市農業というのは非常に多様で、様々な性質を包含しています。本当に幅広い人たちが参加していますし、生産的な栽培システムから単純な箱で何かを育てているものまで含まれている、その幅広さこそが

強みだと思っています。これを今後どのように評価して異なる人たちに発信していけるのかということを考える必要があると思います。まさに今それを実施する重要性が高まっていると思います。なぜなら、気候変動の問題もありますしフード・システムも変えていかなければならないためです。イギリスでは世界的な外資企業は食料生産で利益を追求しているわけですが、それに対抗して都市農業を通して農業を人々の手に戻すことができるのではないかと考えています。

◆メイディアンティ氏

今回このような都市農業の国際会議に参加させていただいた事に大変感謝しています。たくさんの方の経験を学びジャカルタで活かしたいと思っています。ジャカルタでも都市農業をもっと発展させ、参加者を増やすことを目指しています。先ほどソウルのイさんから、都市農業は食料安全という観点においても非常に重要とお話がありましたが、これはジャカルタでも同じです。そのため、ジャカルタでは、生産された野菜などに問題ないかどうかについても研究所で検査をするよう指示されています。

◆後藤氏

私も色々なことを学びました。例えば、ロンドンでは2,000カ所の農園を作ったということですがほかの都市を含めて、そういう取組の根底には、安全で新鮮な食べ物を食べたいという欲求が共通にあるのだと思いました。一方、都市農地で農作物を栽培することはそういったことを叶えると同時に、都市の抱える課題を解決するいろんな機能を果たしているということも共通する事実です。その機能には都市によって多様性があると思いますが、そういう点でも外国の都市も日本の都市も共通だということがわかりました。

◆安藤氏

海外からの参加者の話を聞いて、これまでの考えが改められてとても楽しかったです。特に今日思ったのは、農の担い手、都市農業の担い手が誰かということです。どうしても私たちは当然のようにプロの農業者が一手に担うような考えを持つところがあります。しかし、たとえばアマチュアと言われようが下手であろうが、そういう中で関わって畑を耕し収穫し、それを通

して地域の様々な問題の解決に役立てていく、そういう市民としての関わりのようなものが重要だということを改めて認識させられました。都市農業は、いわば地域の共同事業のようなもので、そこには地域ごとの多様性や幅がありますが、これは都市農業、これは都市農業じゃない、といった頭の硬い区分けをせず、色んなものを柔軟に取り上げていきながら、ローカルな実践で作り出していくことに関わっていきたいと思いました。

◆栗秋氏

私が2年前にこの事業に参加させていただいた時、先ほどのお話にあったように、家庭菜園と農業は違うという意識がありました。しかし、考えてみたら最近やはり自分で作ったもの、ちゃんと正体がわかったものを食べられるという意識が消費者に強くなっているのではないかと思います。私も10数年農業体験農園を利用していますが、やはり自分で作るということが都市農業、都市で農産物を作るということの1つのメリットではないかという気がします。海外のスーパーに行くともわかりますが、どこで採れたか全然わからない、農薬がいつ使ったかわからないものが平気で売られていることもあります。それに比べ、自分で作るという農薬を使用したかも全部分かるということがあります。そういう点は、どこの都市でも同じように意識が変わってきていると思います。それがこの2年間の私の収穫です。

◆伊藤氏

コミュニティの中にいろんな動機があるということを実際に感じています。非常に良いアイデアを持っているコミュニティもあると思いますので、そういったことを具体化していける道筋ができたらいなと思います。私と一緒にNPOを作りたいと言っているメンバーの中に癌になった経験をしている人もいますのでヒーリングやメンタルヘルス等そういった部分や、障害を持った子どもの親御さんが、自分がいつまでいるか分からないので何とか自立できるような場を作りたいとか色々な想いがあると思っていますので、都市農業を通じて取り組んでいきたいと思っています。一方、2年ほどお手伝いしていた農業の方が障害を持たれていて耕作が難しい状況ということもありました。そういったところでコミュニティのニーズと、練馬の中

の農地とを結びつけていけると、これからも農地も残り、また違った農業というののできてくるのではないかと思います。

◆村山氏

私は野菜のおすそ分けという活動についてご報告しましたが、この準備にあたり、練馬区の中で農業体験農園や子ども食堂がどういった意味を持つ活動なのかということを考え直すことができました。海外から来ていただいた皆さんの話を聞いていて、それをまたさらに俯瞰して、貧困問題であるとかそういったコミュニティづくりという観点から、どんな意味を持つのかという視野がすごく広がって、自分がやっているささやかなことをもう一度見直すきっかけになりました。

◆長島氏

私は海外の皆さんのお話を聞いていて、16年も農業体験農園が続いている理由について考えていました。やはり農業体験農園が継続していったのは地域コミュニティという形がしっかりできていたからだと思います。園主さんが先生となって我々生徒と一緒にいる形は16年全く変わらず、どんどん関係性が強いものになっていっているという気がします。いろんなビジネスにおいても同じですが、日本人はどちらかというと先生と生徒という関係があり、その先生を支持して盛り上げていくというようなところがあると思うので、コミュニティって素晴らしいなと改めて思いました。

◆加藤氏

今回のサミットを通じて感じた事は、やはり都市の中に農業者が残っているということは世界的に見ても大変珍しいことであったということです。今はまだ農地が残っていますが、間違いなく減少してきます。相続税の問題があるため、このままいくと最終的にはゼロになっていくかもしれません。しかし、1つの方法として、東京都の制度で農の風景育成地区制度というものがあります。これは相続があっても行政が買い上げる、そのような制度です。この制度を維持していくのはやはり行政で、そこに農業者や市民、NPO、学校が関わっていきませんが、いかに多くの市民の人たちが関り農業を通じて社会の価値観を共有できるかが大切です。今回のサミットを通じて、私なりにヒントがいくつか出てき

ました。実は先月、ニューヨークに行ってきました。ニューヨークは大変パワフルなまちで、このまちの中で今私たちが農業をやったら何ができるのかとその時にすごく考えました。これは面白いことができるなと思いました。お互いの都市、立場でいろんなやり方があります。今回、皆さんの意見が聞けた中で、私の考えがまとまってきたというのが、非常にありがたかったと思っています。

◆井原座長

どうもありがとうございます。今回のこの分科会は「都市の農業を活かしたコミュニティづくり」というテーマで進めてきました。先ほどからのご意見もありましたが、都市農業というのは幅広いものです。実は分科会の打ち合わせの中でも、今回お招きしている都市の都市農業の事例を見て、これは同じ都市農業と言えるのだろうかという議論もありました。しかし、議論を深めていく中で調べていくと、農業を通じていろんな社会的な関わりを持っているということが分かってきました。単に、農業の形態だけではなくて、多様な都市農業をどのように考えていくのか、多様性を持っているという事は一歩間違えるとバラバラになってしまいます。しかしその多様性の中で、ひとつの方向性を作るのであれば、やはりコミュニティというものがひとつのベースになってくるのではないかなと思いました。

以上で、簡単ですが全体のまとめとさせていただきます。どうもありがとうございます。